箱 崎 49

— 箱崎遺跡第73次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1316集

２０１７

福 岡 市 教 育 委 員 会

箱 崎 49

— 箱崎遺跡第73次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1316集

遺跡略号　HKZ－73
調査番号　1501

2017

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

現在，アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し，まちづくりを進めている福岡市は，古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市ではこの交流を物語る文化財の保護に努めていますが，開発によりやむを得ず失われていく遺跡については，記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は，東区箱崎1丁目における共同住宅建設に先立って行われた箱崎遺跡第73次調査を報告するものです。調査の結果，中世から近世に至る遺構，遺物が発見され，当時の生活を復元するうえで多大な成果を上げることができました。本書を文化財保護や普及，教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが，発掘調査から整理，報告に至るまで，株式会社コーセーアールイー様をはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成29年３月27日

福岡市教育委員会
教育長　星　子　明　夫

例　言

1．本書は福岡市東区箱崎１丁目2709番，2708番２内における共同住宅建設に先立ち，福岡市文化財部埋蔵文化財調査課が平成27年４月６日から平成27年８月10日にかけて発掘調査を実施した箱崎遺跡第73次調査の報告である。
2．検出した遺構については，井戸はSE，溝はSD，土坑はSK，ピットはSPとし，一括して通し番号を付した。
3．本書に掲載した遺構の実測，写真撮影，製図は担当の井上繭子が行った。
4．本書に掲載した遺物の実測は林田憲三，谷直子，井上が，写真撮影は井上が，製図は谷，井上が行った。
5．青銅製品埋納遺構（SK110）については，遺構実測，観察，取り上げ、保存処理を福岡市埋蔵文化財センターの上角智希が，青銅製品の実測，製図，所見記述を木下博文が行った。
6．本書の執筆，編集は井上が行った。
7．本調査の出土遺物，記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵，管理されるので活用されたい。

遺跡名	箱崎遺跡	**調査次数**	73次	**調査略号**	HKZ-73
調査番号	1501	**分布地図図幅名**	34　箱崎	**遺跡登録番号**	401312639
申請地面積	928.92㎡	**調査対象面積**	312㎡	**調査面積**	310㎡
調査期間	平成27(2015)年４月６日～平成27(2015)年８月10日			**事前審査番号**	26-2-982
調査地	福岡市東区箱崎１丁目2709番，2708番2				

目　　次

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 2
　１．調査の経過 …… 2
　２．調査の概要 …… 2
　３．第１面の遺構と遺物 …… 8
　　（１）土坑 …… 8
　　（２）井戸 …… 8
　４．第２面の遺構と遺物 …… 9
　　（１）青銅製品埋納遺構 …… 9
　　（２）土坑 …… 13
　　（３）井戸 …… 16
　５．第３面の遺構と遺物 …… 18
　　（１）土坑 …… 18
　　（２）柱穴列 …… 24
　　（３）井戸 …… 24
　６．その他の出土遺物 …… 30
　　（１）包含層出土の遺物 …… 30
　　（２）遺構その他出土遺物 …… 34
　７．まとめ …… 34

挿図目次

第１図　調査地点の位置（1/5000） …… 3
第２図　調査区配置図（1/1000） …… 3
第３図　Ⅰ区第１面遺構配置図（1/100） …… 4
第４図　Ⅰ・Ⅱ区第２面遺構配置図（1/100） …… 5
第５図　Ⅰ・Ⅱ区第３面遺構配置図（1/100） …… 6
第６図　調査区土層実測図（1/80） …… 7
第７図　土坑・井戸実測図（1/30・1/60） …… 9
第８図　土坑出土遺物実測図（１）（1/3） …… 10
第９図　土坑出土遺物実測図（２）（2/3・1/3） …… 11
第10図　SE044出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 12
第11図　SK110遺構・出土遺物実測図（1/20・1/3） …… 14
第12図　SK110出土円筒形青銅製品実測図（1/6） …… 15

第13図　土坑・井戸実測図（1/40・1/60）…… 16
第14図　土坑・井戸出土遺物実測図（1/3）…… 17
第15図　井戸出土遺物実測図（2/3・1/3）…… 18
第16図　土坑実測図（1/30・1/40・1/60）…… 20
第17図　土坑出土遺物実測図（１）（1/3・1/4）…… 21
第18図　土坑出土遺物実測図（２）（1/3）…… 22
第19図　柱穴列・出土遺物実測図（1/60・1/3）…… 23
第20図　井戸実測図（１）（1/60）…… 25
第21図　井戸実測図（２）（1/60）…… 26
第22図　井戸出土遺物実測図（１）（2/3・1/3）…… 27
第23図　井戸出土遺物実測図（２）（2/3・1/3）…… 28
第24図　井戸出土遺物実測図（３）（1/3）…… 29
第25図　包含層出土遺物実測図（１）（2/3・1/3）…… 31
第26図　包含層出土遺物実測図（２）（1/3）…… 32
第27図　その他の出土遺物実測図（2/3・1/3）…… 33

図版目次

図版１　１　Ⅰ区第１面全景（南東から）　２　Ⅰ区第１面北西側（北西から）
３　SK001（東から）　４　SK060（北西から）
５　SK066（南東から）　６　SE044（北から）
７　SE044井側内（東から）
図版２　１　Ⅰ区第２面全景（北西から）　２　Ⅱ区第２面全景（北西から）
３　SK282（東から）　４　SK319（北から）
５　SE479（北東から）　６　SE479井筒（北西から）
図版３　１　SK110検出状況（南から）　２　SK110内部四分割（南東から）
３　SK110内部半裁状況（南から）　４　SK110青銅製品内部（南西から）
５　SK110取り上げ後（北から）　６　SK110掘方完掘状況(南から)
図版４　１　Ⅱ区第３面全景（北西から）　２　Ⅰ区北西側第３面（南西から）
３　Ⅰ区南東側第３面（北東から）　４　SK161（北東から）
５　SK201（北西から）　６　SK133（南東から）
７　SK133完掘（南から）
図版５　１　柱穴列１一段下げ（南西から）　２　柱穴列１完掘（南西から）
３　柱穴列２，３一段下げ（北西から）　４　柱穴列２，３完掘（北西から）
５　SE179（南東から）　６　SE179井筒（北西から）
図版６　１　SE204（南東から）　２　SE202（南東から）
３　SE206，207（南東から）　４　SE204井筒（北西から）
５　SE202井筒（南西から）　６　SE206井筒（北東から）
７　SE427（東から）　８　SE427井筒（北から）
９　SE482（西から）　10　SE482井筒（南から）
図版７　遺物写真１
図版８　遺物写真２

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

2015（平成27）年２月12日付で株式会社コーセーアールイーより共同住宅建設にかかる事前審査申請書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課に提出された。申請地は箱崎遺跡に所在し，周辺では発掘調査等により遺跡の存在が確認されていることから，建築物の基礎構造によっては発掘調査が必要なこと等について，埋蔵文化財審査課と事業主との間で協議を行い，確認調査を実施した。その結果，遺跡の存在が確認され，予定建築物の建設範囲において記録保存のための発掘調査が必要となった。その後申請者と発掘調査期間，予算，工程について協議を行い，発掘調査のための委託契約を締結した。調査は2015（平成27）年４月６日に着手し，2015（平成27）年８月10日に終了した。

２．調査の組織

調査委託　株式会社　コーセーアールイー

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：平成27年度・資料整理：平成28年度）

調査総括　文化財部埋蔵文化財調査課（28年度　埋蔵文化財課）　課長　常松幹雄

調査第１係長　吉武　学

庶　　務　文化財部埋蔵文化財審査課（28年度　埋蔵文化財課）　課長　米倉秀紀（27年度）

管理係長　大塚紀宜

管理係　川村啓子（27年度）

管理係　入江よう子（28年度）

事前審査　文化財部埋蔵文化財審査課（28年度　埋蔵文化財課）

事前審査係長　佐藤一郎

主任文化財主事　池田祐司

事前審査係　板倉有大（27年度）

事前審査係　吉田大輔（28年度）

調査担当　文化財部埋蔵文化財調査課（28年度　埋蔵文化財課）

主任文化財主事　井上繭子

発掘作業　石井清子　岩永いさ子　岩佐克行　小野千佳　河原明子　定直康浩　節政善憲
高手與志子　高橋茂子　豊丸秀仁　野口リウ子　平江裕子　山田美恵子　山田ヤス子
脇田誠二

整理補助　林田憲三　谷直子

整理作業　有島美江　林由紀子　冨田文代　箱嶋ひかり

Ⅱ　遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は，博多湾岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる古砂丘上に立地する。この砂丘は東区箱崎から早良区百道まで南北に延びており，箱崎遺跡はこの北端部に位置するが，西を博多湾，東を多々良川の支流である宇美川に画される。博多湾から東側まで入り江が湾入していたが，中世には「箱崎津」と呼ばれた港が機能していた。

箱崎遺跡では現在までに82次の調査が行われており，その成果により古砂丘の旧地形が明らかになりつつある。南北方向に長い尾根を持ち，東西両側にゆるく傾斜しつつ，博多湾側である尾根の西側の方が，東側より緩く，広い斜面を形成していた。砂丘のやや南寄りに尾根の頂部が位置し，筥崎宮が立地するが，この南側で砂丘はくびれ，さらに南東側の砂丘斜面は河川により浸食されている。

現在までの発掘調査でも箱崎の歴史的状況が明らかになってきている。遺構として確実なのは筥崎宮の創建時期である10世紀前半から11世紀中頃まで遡る。筥崎宮の南東部から南側の範囲に分布する。越州窯系青磁，白磁，石帯巡方や斜格子目叩きの瓦などの出土からも当該範囲には公的施設の存在が窺える。次の11世紀後半から12世紀前半の時期には，遺跡の範囲は北側に拡大する。集落的様相が強くなり，筥崎宮の門前町が形成されていったと見られる。12世紀中頃から12世紀後半には，遺跡範囲はさらに西側にも拡大する。集落が継続して展開し，土壙墓や木棺墓が出現し始める。13世紀前半から14世紀前半の時期には，砂丘西側を積極的に利用して整地を進めた痕跡が見られる。また，整地層に焼土が含まれることから，文永11（1274）年の文永の役に関連すると考えられる。最後は14世紀中頃から16世紀頃までで筥崎宮の南側を主体とする。

以上のように，箱崎遺跡は筥崎宮が創建されて以来，公的施設，集落の形成，ひいては都市としての展開と発展を遂げてきた。歴史的文献と考古学的発掘調査からこれらの歴史が今後とも明らかになっていくと思われる。

（参考文献）榎本義嗣「箱崎」『中世都市・博多を掘る』2008年，海鳥社

Ⅲ　調査の記録

１．調査の経過

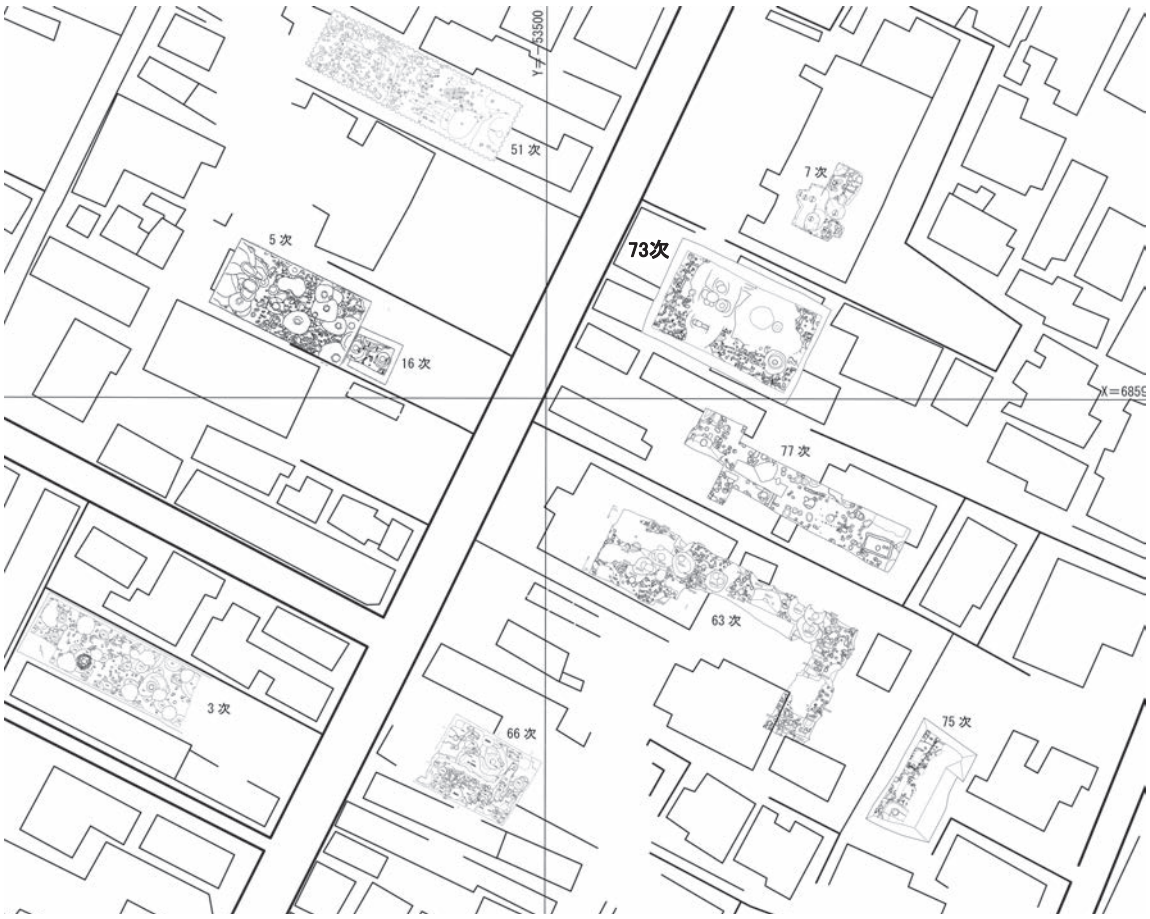
発掘調査の対象は，予定建造物の地下への影響が及ぶ312㎡を対象とした。事前の試掘調査では，地表面から110cm以下で第１面である遺構面が確認されていたが，盛土の除去及び土留め工事は行われないため，調査対象範囲を２ヵ所に分けて反転して発掘調査を行うことにした。

発掘調査は平成27年４月６日に開始した。車両の乗り入れの関係から，調査対象範囲の北側をⅠ区，南側をⅡ区とし，Ⅰ区，Ⅱ区の順番で，重機による盛土除去，人力での遺構検出及び掘削，図面作成及び写真撮影を行った。すべての調査が終了した後，埋戻し，器材の撤収を行い，出土遺物及び器材の洗浄を行って，平成27年８月10日に終了した。

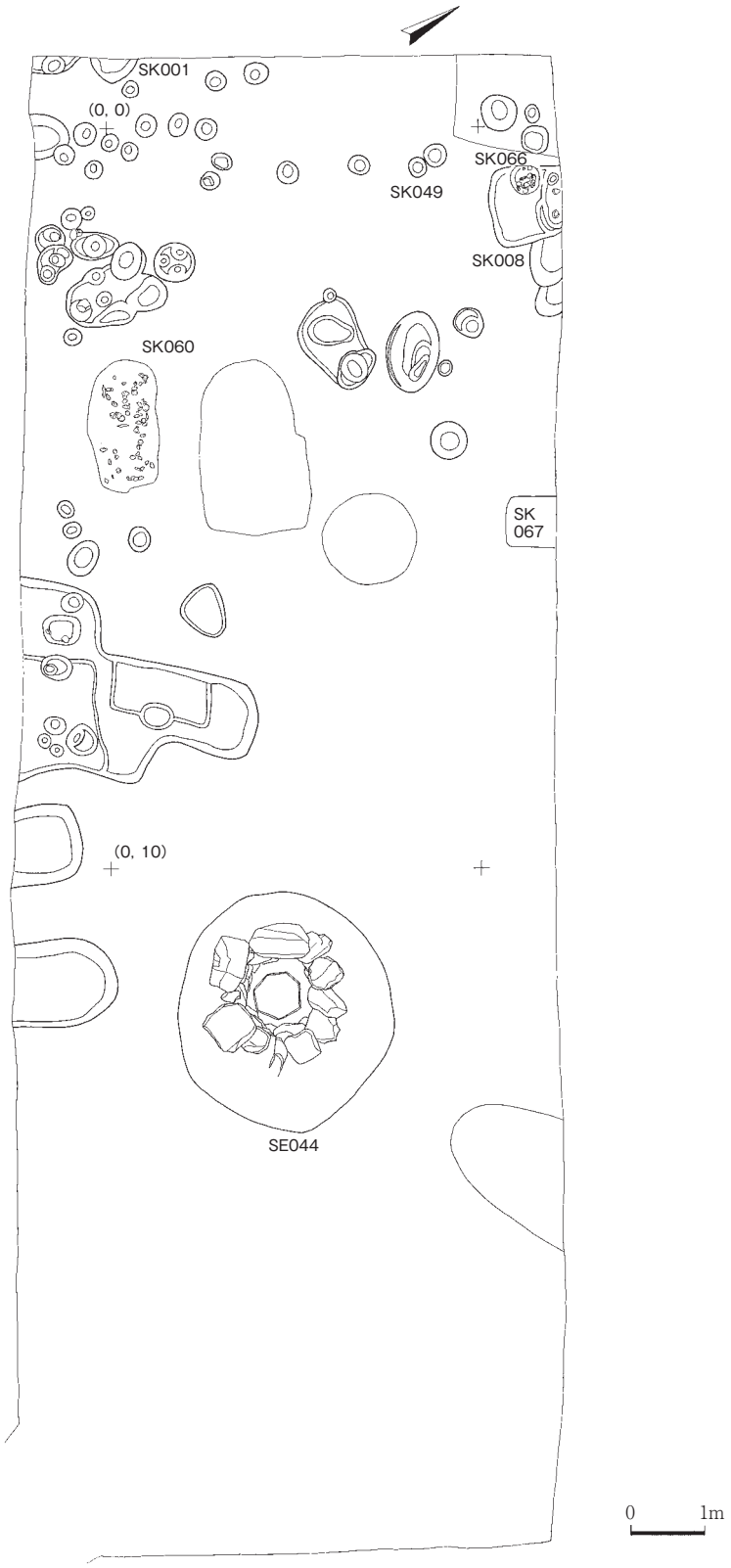
２．調査の概要

Ⅰ区は調査対象範囲の北側1/2範囲を設定した。重機での掘削中，現地表面下約90cmで焼土面が検出されたため，いったんこの面で確認を行った。この面は，調査地点西側に位置する第51次調査地点で検出された焼土面と一連のものである可能性が高かったが，遺構が不明瞭であることと，古い時期の遺物が確認されなかったことから，当初の予定通り掘り下げることにした。現地表面から約120cm

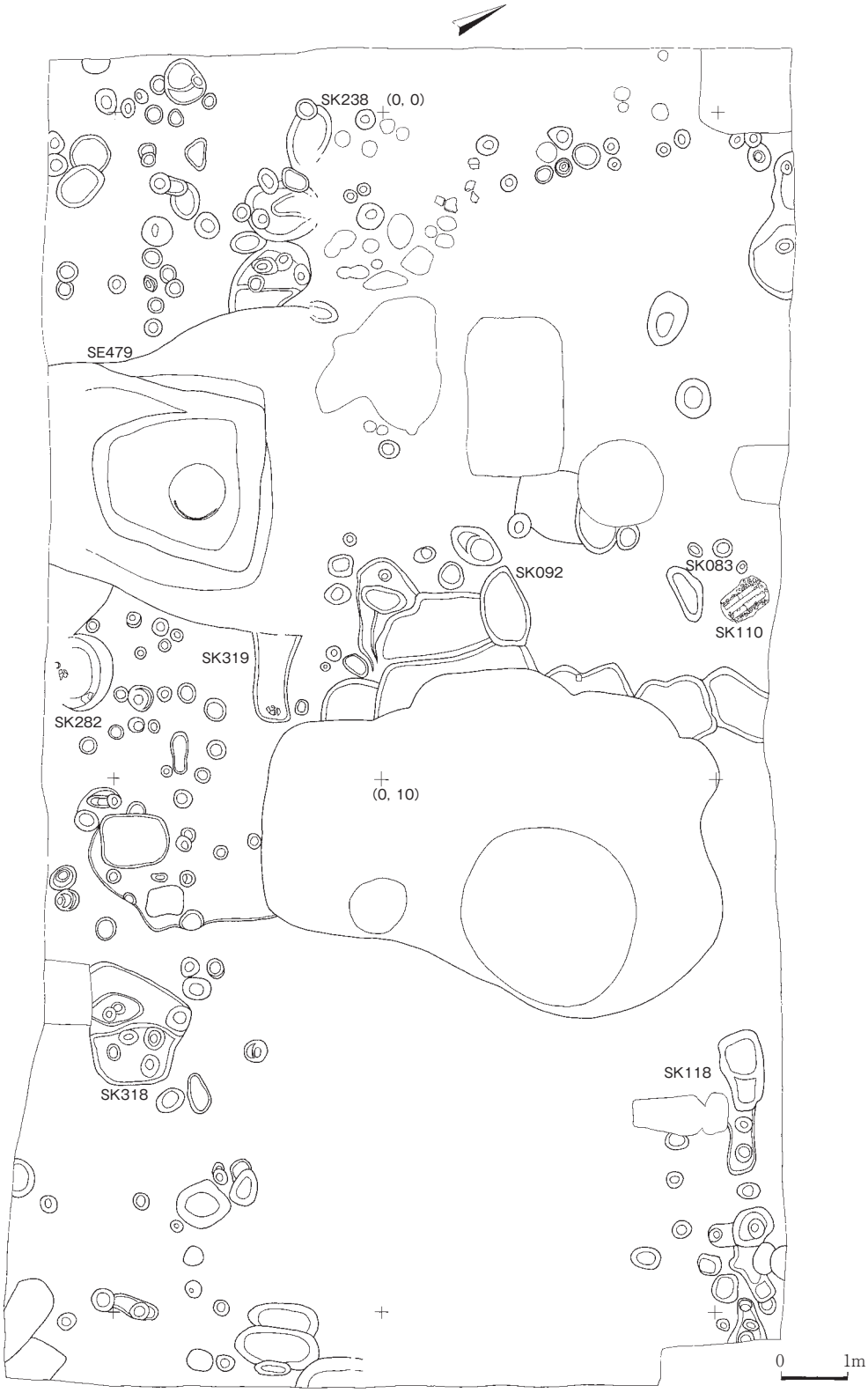
第１図　調査地点の位置（1/5000）



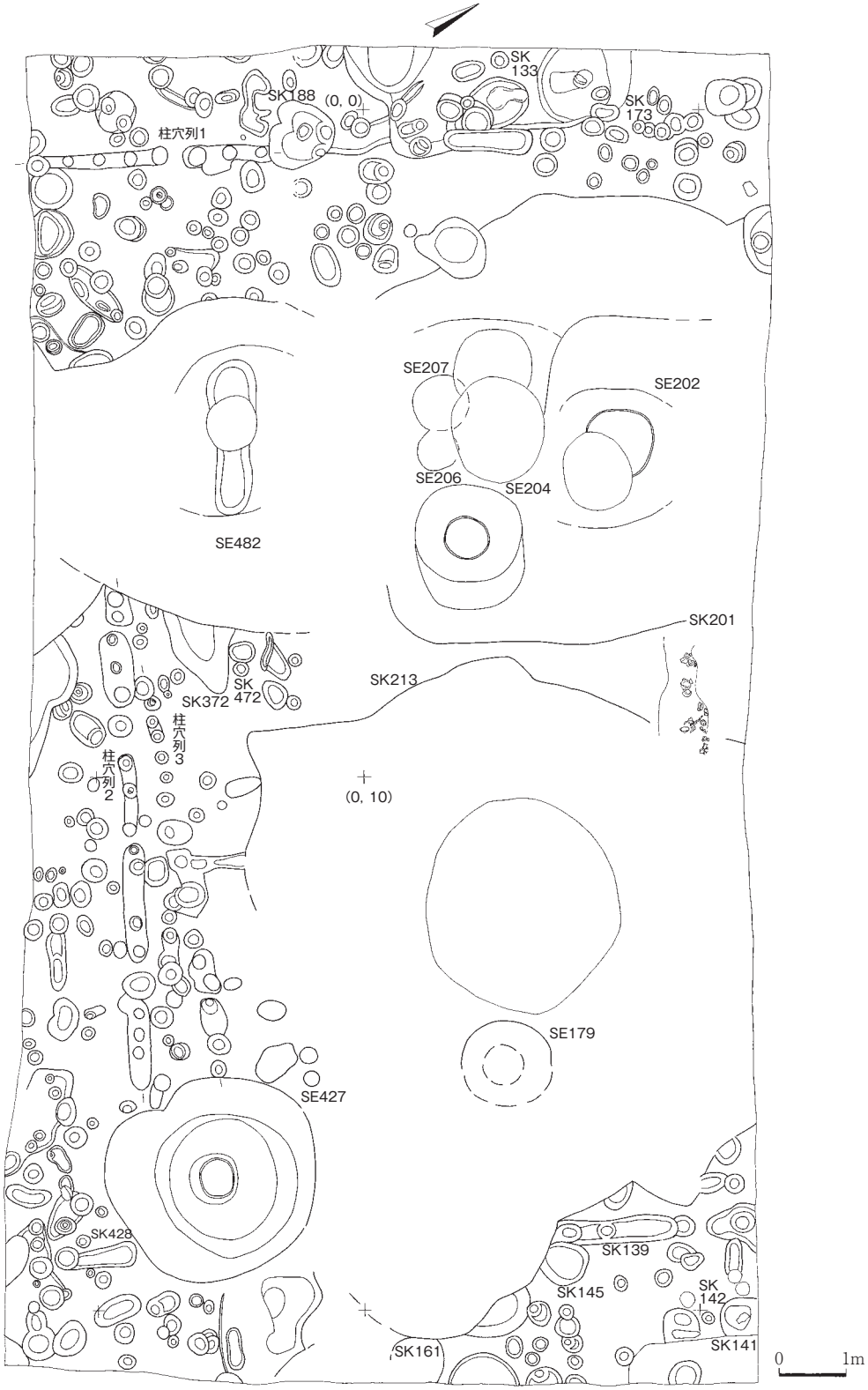
第２図　調査区配置図（1/1000）



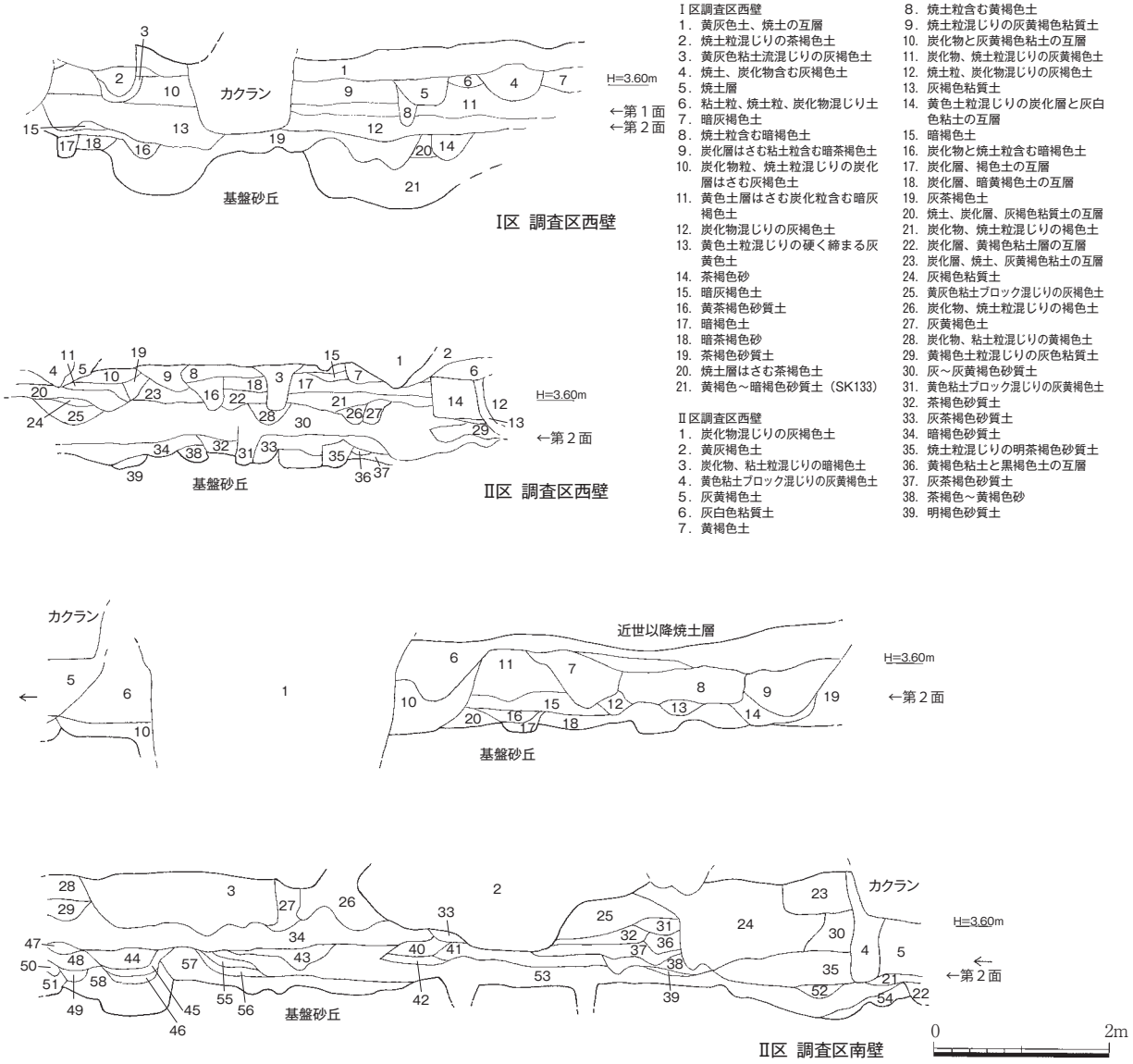
第３図　Ⅰ区第１面遺構配置図（1/100）



第４図　Ⅰ・Ⅱ区第２面遺構配置図（1/100）



第５図　Ⅰ・Ⅱ区第３面遺構配置図（1/100）



Ⅰ区調査区西壁
1．黄灰色土、焼土の互層
2．焼土粒混じりの茶褐色土
3．黄灰色粘土流混じりの灰褐色土
4．焼土、炭化物含む灰褐色土
5．焼土層
6．粘土粒、焼土粒、炭化物混じり土
7．暗灰褐色土
8．焼土粒含む暗褐色土
9．炭化層はさむ粘土粒含む暗茶褐色土
10．炭化物粒、焼土粒混じりの炭化層はさむ灰褐色土
11．黄色土層はさむ炭化粒含む暗灰褐色土
12．炭化物混じりの灰褐色土
13．黄色土粒混じりの硬く締まる灰黄色土
14．茶褐色砂
15．暗灰褐色土
16．黄茶褐色砂質土
17．暗褐色土
18．暗茶褐色砂
19．茶褐色砂質土
20．焼土層はさむ茶褐色土
21．黄褐色～暗褐色砂質土（SK133）

Ⅱ区調査区西壁
1．炭化物混じりの灰褐色土
2．黄灰褐色土
3．炭化物、粘土粒混じりの暗褐色土
4．黄色粘土ブロック混じりの灰黄褐色土
5．灰黄褐色土
6．灰白色粘質土
7．黄褐色土
8．焼土粒含む黄褐色土
9．焼土粒混じりの灰黄褐色粘質土
10．炭化物と灰黄褐色粘土の互層
11．炭化物、焼土粒混じりの灰黄褐色土
12．焼土粒、炭化物混じりの灰褐色土
13．灰褐色粘質土
14．黄色土粒混じりの炭化層と灰白色粘土の互層
15．暗褐色土
16．炭化物と焼土粒含む暗褐色土
17．炭化層、褐色土の互層
18．炭化層、暗黄褐色土の互層
19．灰茶褐色土
20．焼土、炭化層、灰褐色粘質土の互層
21．炭化物、焼土粒混じりの褐色土
22．炭化層、黄褐色粘土層の互層
23．炭化層、焼土、灰黄褐色粘土の互層
24．灰褐色粘質土
25．黄灰色粘土ブロック混じりの灰褐色土
26．炭化物、焼土粒混じりの褐色土
27．灰黄褐色土
28．炭化物、粘土粒混じりの黄褐色土
29．黄褐色土粒混じりの灰色粘質土
30．灰～灰黄褐色砂質土
31．黄色粘土ブロック混じりの灰黄褐色土
32．茶褐色砂質土
33．灰茶褐色砂質土
34．暗褐色砂質土
35．焼土粒混じりの明茶褐色砂質土
36．黄褐色粘土と黒褐色土の互層
37．灰茶褐色砂質土
38．茶褐色～黄褐色砂
39．明褐色砂質土

Ⅱ区調査区南壁
1．灰茶褐色砂質土、中世井戸掘方
2．灰黄褐色粘質土
3．礫混じりの黄灰色粘質土
4．炭化物混じりの暗灰褐色砂質土
5．やや暗い灰褐色砂質土
6．炭化粒含む暗灰褐色砂質土
7．粘性ある灰褐色土
8．炭化物、焼土混じりの灰褐色土
9．やや粘性ある灰褐色土
10．茶褐色～黄褐色砂
11．炭化物、粘土ブロック混じりの灰褐色砂質土
12．砂混じりの灰褐色土
13．黄色ブロック混じり土
14．灰茶褐色砂質土
15．灰褐色土
16．茶褐色砂、黄褐色砂
17．暗褐色砂質土
18．灰茶褐色砂質土
19．明茶褐色砂
20．茶褐色砂
21．茶褐色砂、黄褐色砂
22．褐色砂質土
23．灰黄褐色粘質土
24．粘土ブロック、炭化物混じりの暗灰褐色砂質土
25．焼土ブロック、炭化物混じりの暗赤褐色土
26．黄色粘土ブロック、炭化物混じりの灰褐色土
27．焼土、炭化物含む暗赤褐色土
28．黄褐色土
29．黄灰色ブロック粘土混じり土
30．灰黄褐色粘質土
31．粘土ブロック混じりの灰褐色土
32．黄灰色粘土ブロック混じり土
33．焼土
34．炭化物粒混じりの暗灰褐色土
35．灰黄色粘土ブロック混じりの暗灰褐色砂質土
36．灰褐色粘質土
37．黄色粘土ブロックやや混じる灰褐色土
38．黄色粘土ブロック混じりの灰黄褐色土
39．灰褐色土
40．黄色粘土混じりの灰褐色土
41．暗灰褐色土
42．赤褐色粘土ブロック、炭化物混じりの茶褐色土
43．黄白色粘土ブロック混じりの灰黄褐色土
44．炭化物、黄色粘土粒混じりの灰黄褐色土
45．炭化物、粘土粒混じりの灰褐色土
46．黄色粘土混じりの灰茶褐色土
47．黄色粘土ブロック混じり土
48．炭化物、粘土ブロック混じりの灰茶褐色土
49．暗褐色土
50．黄色ブロック混じりの灰茶褐色土
51．灰茶褐色砂
52．暗灰褐色土
53．灰褐色土
54．炭化物混じりの褐色砂
55．黄白色粘質土
56．土師皿、炭化物混じりの灰褐色土
57．黄褐色砂混じりの灰茶褐色砂質土
58．炭化物、粘土ブロック少量混じる灰茶褐色砂質土

第６図　調査区土層実測図（1/80）

まで掘り下げた暗褐色土層上面を第１面として設定した。

第１面では，現地表面から120cm以上掘削した西側の一部を除いて全体的に遺構が不明瞭であった。西側で，土師器の集積遺構，ピット，調査区中央付近で近世井戸の掘方を検出した。第２面は，第１面を約30cm掘り下げた面で，柱穴，土坑の他，青銅製品埋納遺構を検出した。この面でも調査区東側は遺構が不明瞭であった。第３面は，基盤砂丘面上で，中世及び近世の井戸，その他上面からの掘り残しである柱穴や土坑などが検出された。第３面の状況から，第１面，第２面はそのほとんどを占め

る範囲が井戸の掘方内であることが判明した。

Ⅱ区は，Ⅰ区の調査終了後，南側に設定したが，Ⅰ区の調査成果から，Ⅰ区第２面に相当する面まで重機で掘り下げ，第１面としたが，Ⅰ区に合わせて，この面を第２面とする。Ⅱ区の第２面では，土坑，柱穴の他，掘方が方形を呈する井戸が検出された。基盤砂丘面上である第３面では，布掘りの柱穴列，井戸が検出された。

なお，以下の記述では，Ⅰ区，Ⅱ区合わせて説明を行う。

３．第１面の遺構と遺物

（１）土坑

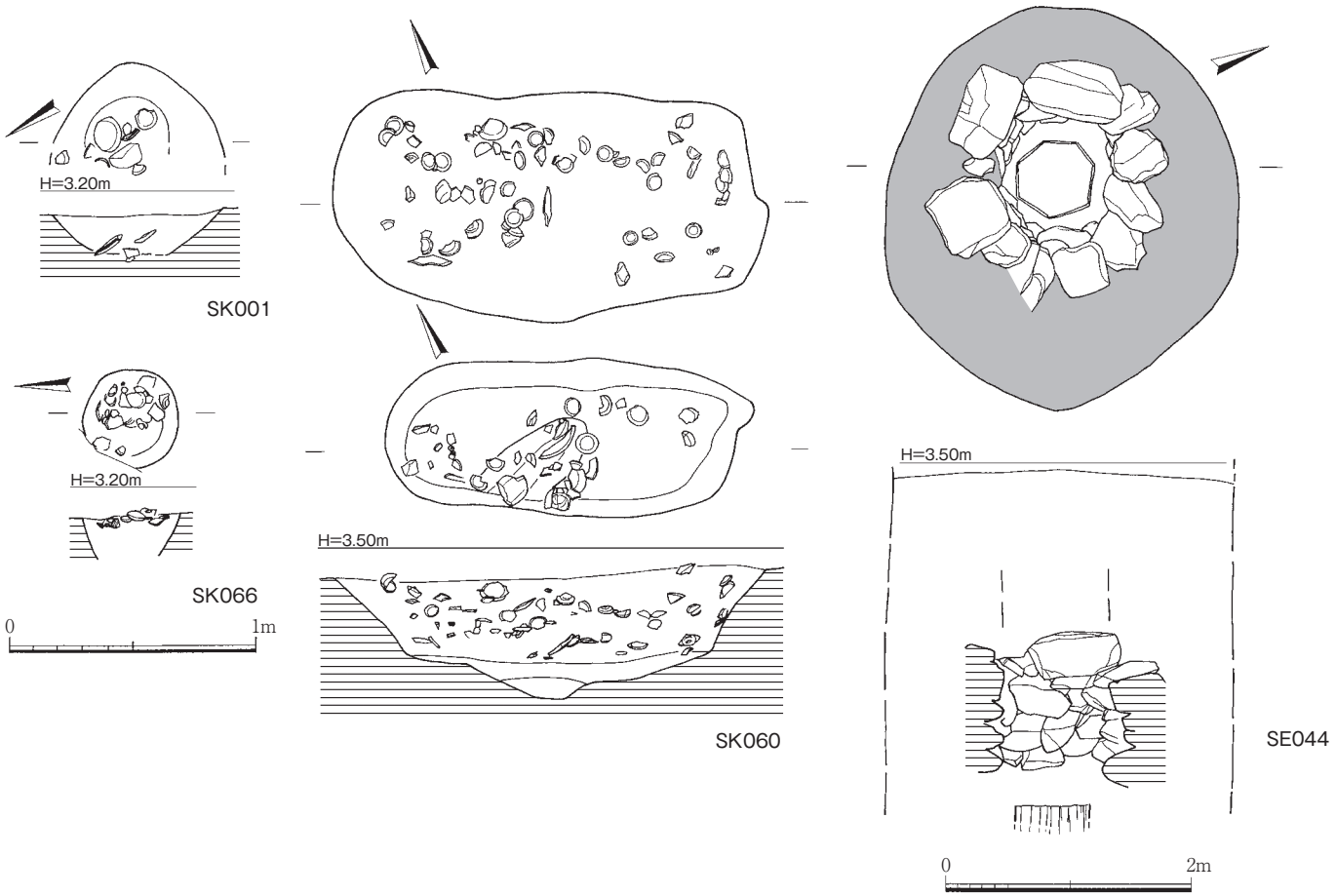
SK001（第７図・図版１－３） Ⅰ区の西側端に位置する。一部を壁に切られていた。最大径70cmの平面円形で深さ16cmを測る。白磁碗，青磁碗，黒色土器，土師器坏及び皿が投棄されていた。遺物の組成から12世紀前半頃か。**出土遺物（第８図１～７・図版７）** １，２は白磁碗。２は外面にかぎ状の文様が施される。３は黒色土器の埦。口縁部から外面にかけて黒色を呈する。４は土師器の坏。口径14.8cm，器高2.3cm，底径12.0cmで，糸切の底部に板圧痕が残る。５～７は土師器の皿。口径9.2～9.8cm，器高1.0～1.6cm，底径7.2～7.7cmを測る。５は，底部に板圧痕が残り，６，７はヘラ切りの底部である。また，７は底部に焼成後穿孔が施される。

SK060（第７図・図版１－４） 調査区南側壁際西寄りに位置する。平面は楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸0.9m，深さ0.5mを測る。土師器坏，土師器皿，陶磁器，土製品，滑石製鍋，鉄製品が土坑の全面で検出された。土師器坏，皿，石鍋から見ると，14世紀前後の時期と考えられる。**出土遺物（第８図８～57，第９図１～７・図版７）** ８は青磁の皿。見込みには櫛描文が施される。９は青白磁の小壷。10は陶器の小壷の口縁部。11から17は土師器坏。口縁部11.3～14.0cm，器高2.4～3.0cm，底径7.5～10.2cmを測る。すべて糸切底であるが，12，14，15，17は板圧痕が残る。18から50は土師器皿である。口径7.5～8.3cm，器高0.9～1.5cm，底径5.8～6.9cmを測る。すべて底部は糸切底，19，20，21，22，23，27，30，32，33，38，39，40，41，43，44，49は板圧痕が残る。また，47，48は底部に焼成後穿孔が見られ，49は口縁部に打ち欠きが見られた。51，52は滑石製の石鍋。53は球形の土製品。54～57は鉄製品。54～56は釘。57は刀子。第９図１～７は銅銭。１は「政和通寶」，２は「嘉祐通寶」，３，４は「天聖元寶」，５は「政和通寶」，６は「祥符元寶」，７は「熙寧元寶」である。

SK066（第７図・図版１－５） 調査区北角付近に位置する。平面はほぼ円形を呈し，径0,4m，深さ16cm以上である。青磁碗，四耳壷，高台付き土師器坏，擂鉢が出土している。12世紀前後か。**出土遺物（第９図８～13・図版７）** ８は白磁碗。９は陶器の四耳壷。10は高台付きの土師器坏。口径8.7cm，器高2.5cm，高台径6.0cm。11～13は須恵質のこね鉢である。

（２）井戸

SE044（第７図・図版１－６，７） 調査区東寄りに位置する。石組の井側は第３面の基盤砂層検出中で確認されたが，掘方は第１面から検出されたため，第１面での遺構とする。第１面で検出された掘方は平面がやや楕円形を呈し，長軸3.5m，短軸2.8mを測る。掘方を少しずつ掘削しながら，第３面まで遺構面を下げた段階で，掘方内で小ぶりの石がびっしり検出された。当初は判明しなかったが，石を少し除去したところ，井側の石組が確認されたため，上部の裏込めの石が崩落したものと判断される。井側の石組は最大75cm×35cmの石を平面円形に組み上げたもので，１mの高さで残存していた。井筒は結桶で，平面が七角形を呈するように組んである。井側と掘方の間には裏込めの石が充填されていた。本来は井側の石組は上部まであったと思われるが，井戸の廃絶の際に石組を抜かれ，裏



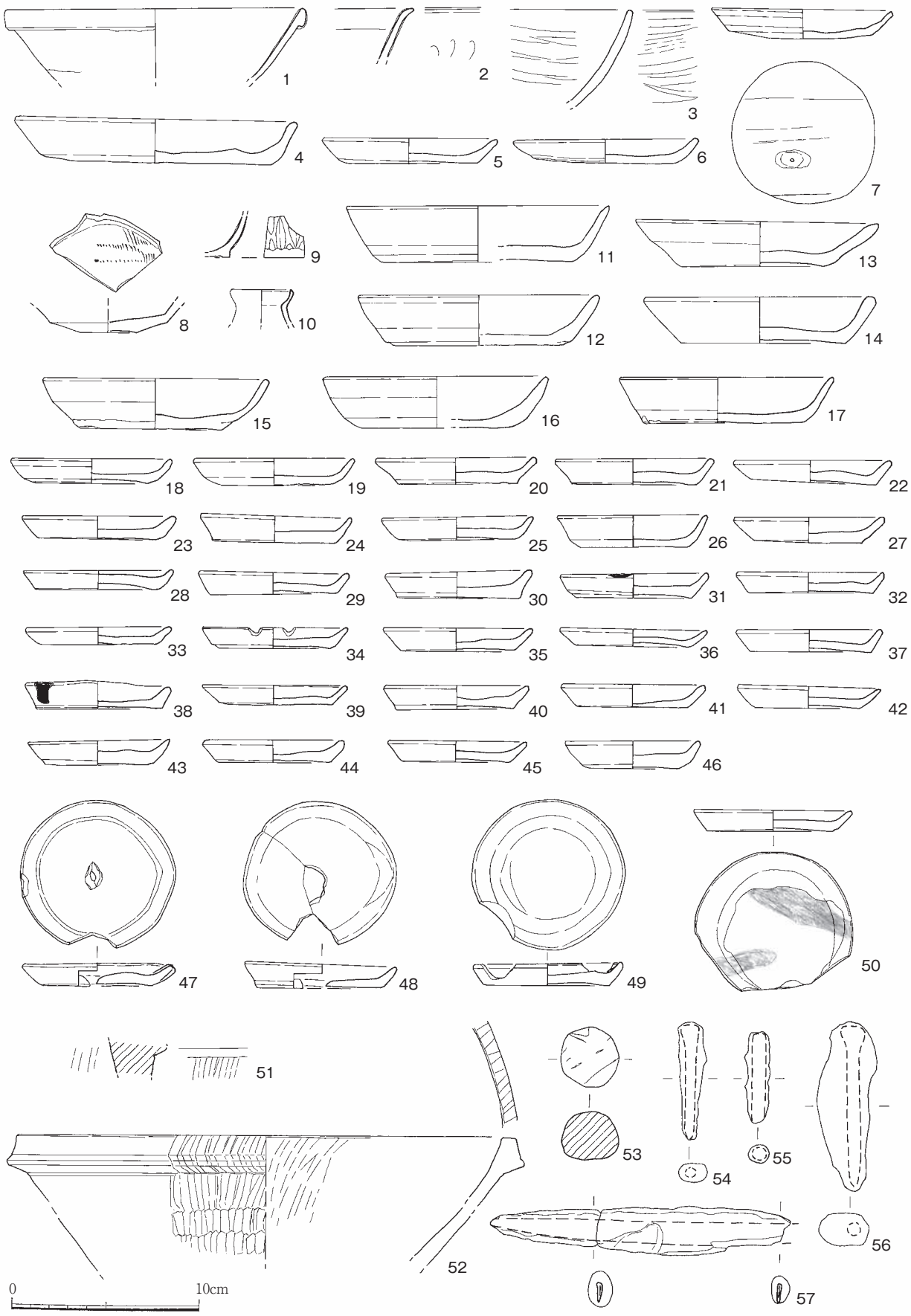
第７図　土坑・井戸実測図（1/30・1/60）

込めの石が下部に崩落したものと考えられる。出土遺物から17世紀頃であろう。**出土遺物（第10図）**
１は白磁碗。２は白磁の小皿。仏具か。３は龍泉窯系の青磁碗。外面にはヘラ彫りの連弁文が施される。４，５は高麗青磁。壷か瓶の胴部片である。４は黒色の象嵌が施される。５は黒褐色の鉄絵で柳文の象嵌が施される。６は備前焼の擂鉢。７は瀬戸焼の卸皿。８は瓦質釜の把手。９は瓦質の擂鉢。10～12は土師器の坏。10は口径15.6cm，器高3.0cm，底径9.2cm。糸切底で板圧痕が残る。11は口径15.0cm，器高3.7cm。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。12は口径11.7cm，器高2.8cm，底径9.8cm，底部はヘラ切りで板圧痕が残る。13～16は土師器皿。13は口径9.5cm，器高1.4cm，底径7.5cm。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。14は口径9.6cm，器高1.2cm，底径6.8cm，底部は糸切りで板圧痕が残る。15は口径7.4cm，器高1.8cm，底径5.6cm，底部は糸切りで板圧痕が残る。16は口径8.8cm，器高1.0cm，底径7.6cm，底部は糸切り，板圧痕が残る。17～21は瓦。17，18は軒丸瓦で巴文，珠文が見られる。19は軒平瓦。唐草文が施される。20は丸瓦で，内面に布目痕が残る。21は穿孔のある平瓦。23～26は滑石製石錘。滑石製石鍋の転用品。

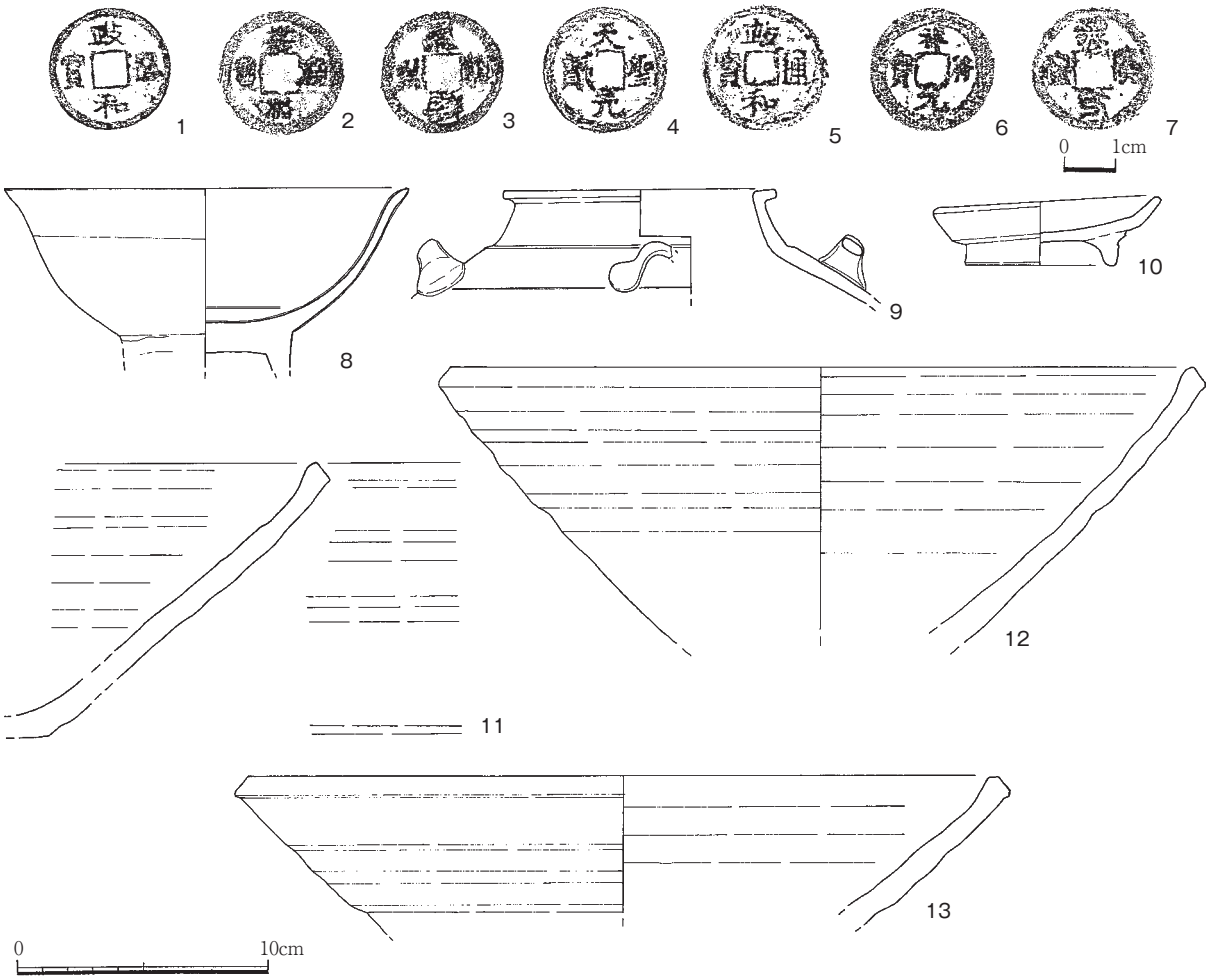
４．第２面の遺構と遺物

（１）青銅製品埋納遺構（SK110）（第11図・図版３）

調査区北壁付近中央寄りで検出した。第２面を検出中青銅製品が一部露出した状態で確認されたため，注意して表面の土を除去していくと，筒状の青銅製品が横に埋置された状態で検出された。当初

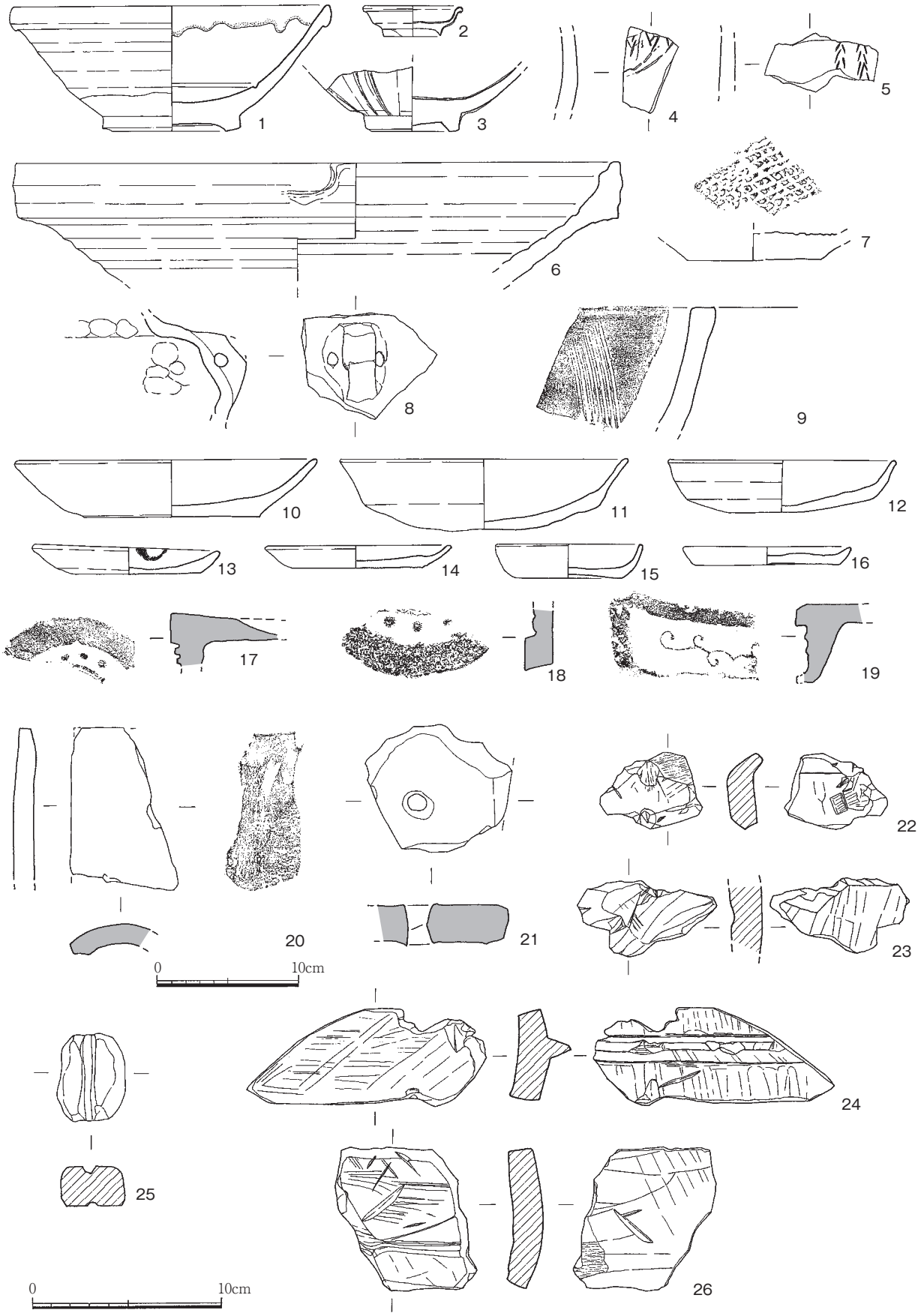


第８図　土坑出土遺物実測図（１）(1/3)



第９図　土坑出土遺物実測図（２）(2/3・1/3)

経筒と思われたため，さらに土を除去して清掃していくと，青銅製品は２枚の銅板を中ほどで鋲止めし，筒状に曲げた形状をなし，それを横に埋置して内部と外部に木炭を充填している状況が明らかになった。充填されている木炭には土が混じっておらず，また，火葬骨片なども確認されていない。木炭の形状から，青銅製品内部の木炭は，埋置当初より充填されているものであると推定される。掘方は検出時は明瞭でなかったが，青銅製品内外の掘り下げの段階で明らかになった。平面は青銅製品及び木炭の範囲を取り囲むような形状であり，壁もまっすぐ立ち上がる。青銅製品内部の上部は空間があり，当初青銅製品は円筒状であったが，土圧により上面の閉合部が空いたものと推定される。青銅製品の端部の穿孔に外側から通した青銅製の針金が付属していた。銅筒をタガ状に締めたものかもしれない。青銅製品，木炭を取り上げ後，掘方の底部を検出すると，緑青色の硬く固まった土が馬蹄形に廻っている状況が確認された。形状が青銅製品と異なったため，当初は別の遺構と考えた。しかし，後述のように，さらに下層には関連した遺構が見られなかったため，青銅製遺物周辺の砂粒や鉱物と遺物から流出した銅イオンが結合して緑色固化した痕跡の一部か，埋置するために土を盛り上げた跡が変性したものと考えられる。さらに下層を掘削したところ，柱痕が残る柱穴状の遺構となった。これは青銅製品埋納遺構の掘方とほぼ重なるものであり，同一遺構と想定される。これらのことから，青銅製品は柱の根巻であり，本来，当該箇所には柱が立っており，建物廃絶後，柱の根巻であった青



第10図　SE044出土遺物実測図（1/3・1/4）

銅板を地鎮の目的で木炭とともに柱穴に埋置したという状況が推定されるのではないか。**出土遺物（第11図１・２，第12図・図版８）** 埋納遺構は青銅製品の他，木炭にごく微量の木の葉のような有機物が含まれているのみであったが，検出時に少量遺物が出土している。１は土師器の碗。２は青銅製品の下で検出した。小片ではあるが，摺り目の入る擂鉢である。胎土や色調から14世紀頃か。

第12図は円筒形青銅製品である。長さ61.0cm，横径25.4cmである。円筒形に曲げた厚さ0.1cmで縦25.7cm及び36.2cmの２枚の銅板を縦方向に1.5cm分重ね，その上から径0.7cmの鋲を７か所打ち込み，留めている。銅板の横両端の間が８cm余り開いており，断面では縦径17.5cmで楕円形にやや押しつぶされた形状をしている。全体的に緑青に覆われ，青緑色をしているが，内面は黒ずんでいる。

用途については推測の域を出ないが，出土遺構の掘方が最終的に柱穴状であったこと，円筒形が埋納のための加工ではなく使用時当初のものとみられることから，腐食を防止するため掘立柱の根元に巻かれた根巻ではないかと考える。建物の柱の径は銅板の横の長さから径21cm程度とみられる。柱の根巻であった場合，柱への銅板の固定方法が問題となる。銅板の横両端には鋲留の穴などはなく，何らかの形で緊縛していたと考えられるが，錆のためか銅板の外面には痕跡が見当たらない。青銅製品とともに径0.4cmの曲がった銅線が出土しており（第12図２・３），緊縛に使われたものか。銅の酸化により生成する緑青には有機物の腐食を防止する効果があり，寺社建築，例えば鳥居などをはじめ木柱の根元に銅板を巻く例が多い。

出土状況は，柱穴状遺構の最上部に横倒しにして木炭粒を密に詰めており，単なる廃棄ではなく丁寧な埋納といえるものであった。これは平安時代末期に盛んであった経塚造営における経筒の埋納方法に近い。

以上の点から，付近に聖性のある何らかの重要な建物があり，その廃絶後の儀礼として埋納されたものであろう。これが確かならば同じ遺構が最低もう1ヵ所付近に存在し，調査区外で検出される可能性も考えられる。年代は，伴出遺物がきわめて少なく決め手に欠けるが，すり鉢の破片があることから鎌倉時代後期～南北朝時代，14世紀代を上限とするものとみておきたい。

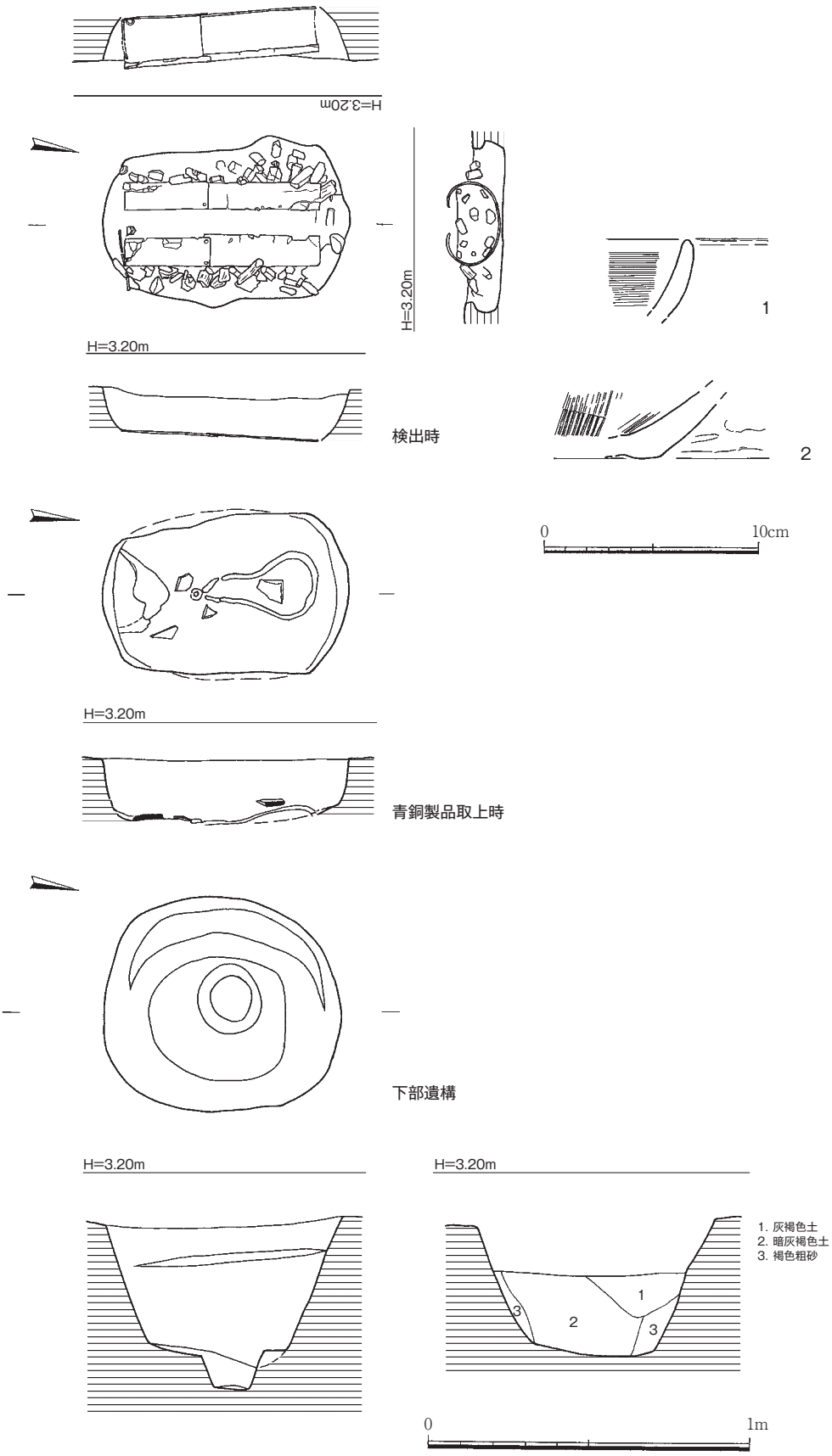
発掘調査において柱を立てた穴は多数確認される。木の柱そのものも条件が良好でない限り腐食してしまい，検出されるのがきわめて稀ではあるものの，全くないわけではない。だがその上に巻いたであろう銅板が出土することは転用・再利用のためか絶無とみられ，このような事例は，管見では知らない。今後の事例追加や研究を俟たねばならないが，地鎮や建物廃絶に関する儀礼の考古学的変遷のほか建築史的にも貴重な事例になりうる。

（２）土坑

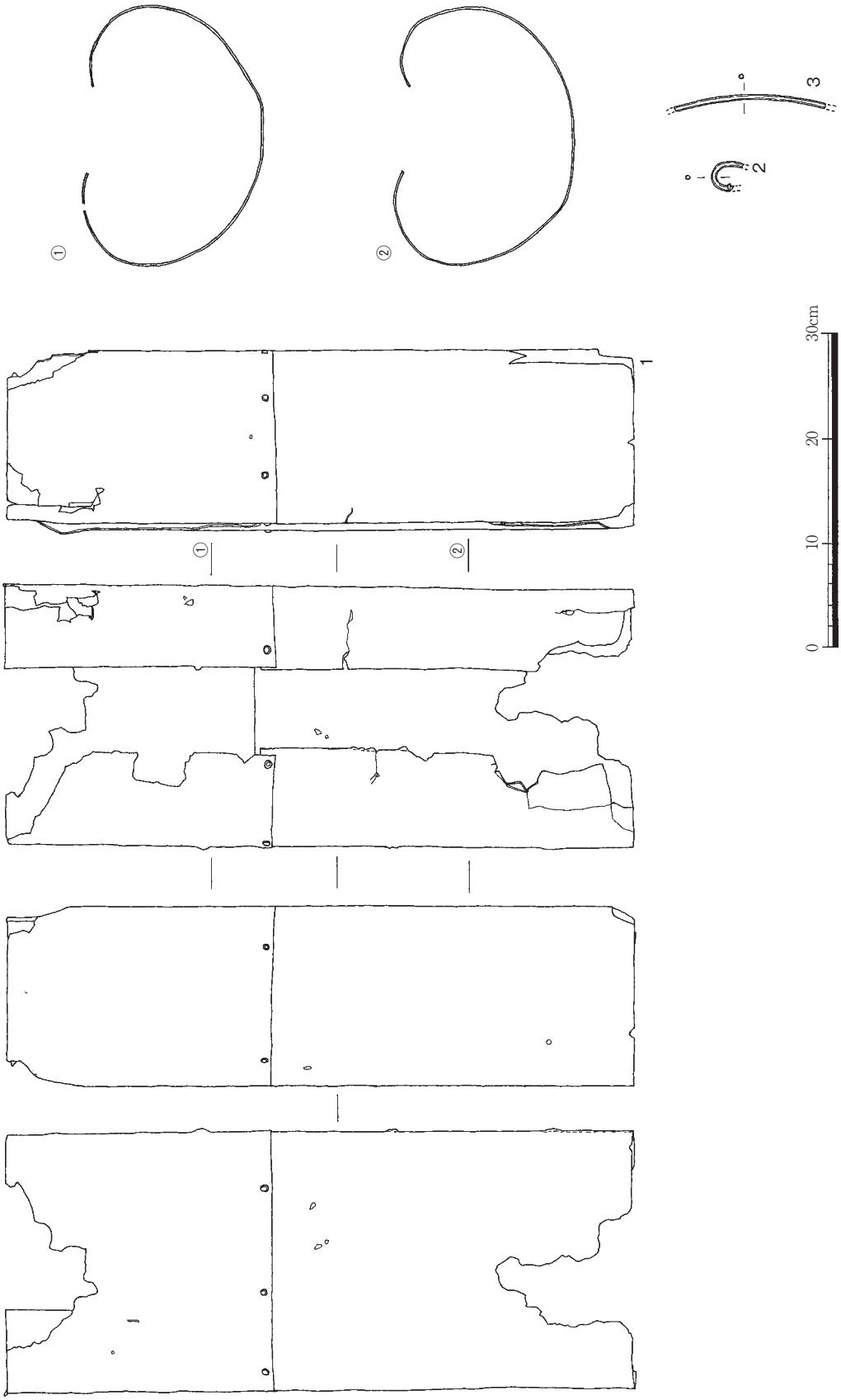
SK282（第13図・図版２－３） 調査区南壁際中央寄りに位置する。南側を壁に切られているが，平面はほぼ円形を呈し，径1.1m，深さ28cmである。12世紀代。**出土遺物（第14図１～14）** １は白磁皿。２は瓦質のこね鉢か。３は須恵質の擂鉢。５～８は土師器の坏。口径15.0～16.0cm，器高3.0～3.3cm，底径9.8～12.0cm。すべて糸切底で板圧痕が残る。９は高台付きの土師器埦。復元底径6.8cm。10～14は土師器の皿。口径8.4～9.3cm，器高0.9～1.1cm，底径7.0～8.0cm。10の底部がヘラ切りの他は，すべて糸切底で，11以外は板圧痕が残る。４は鉄製の刀子片。

SK319（第13図・図版２－４） 調査区南寄り付近に位置する。掘方は明瞭でないが，平面は楕円形で長軸1.3mを測る。**出土遺物（第14図15）** 白磁碗。

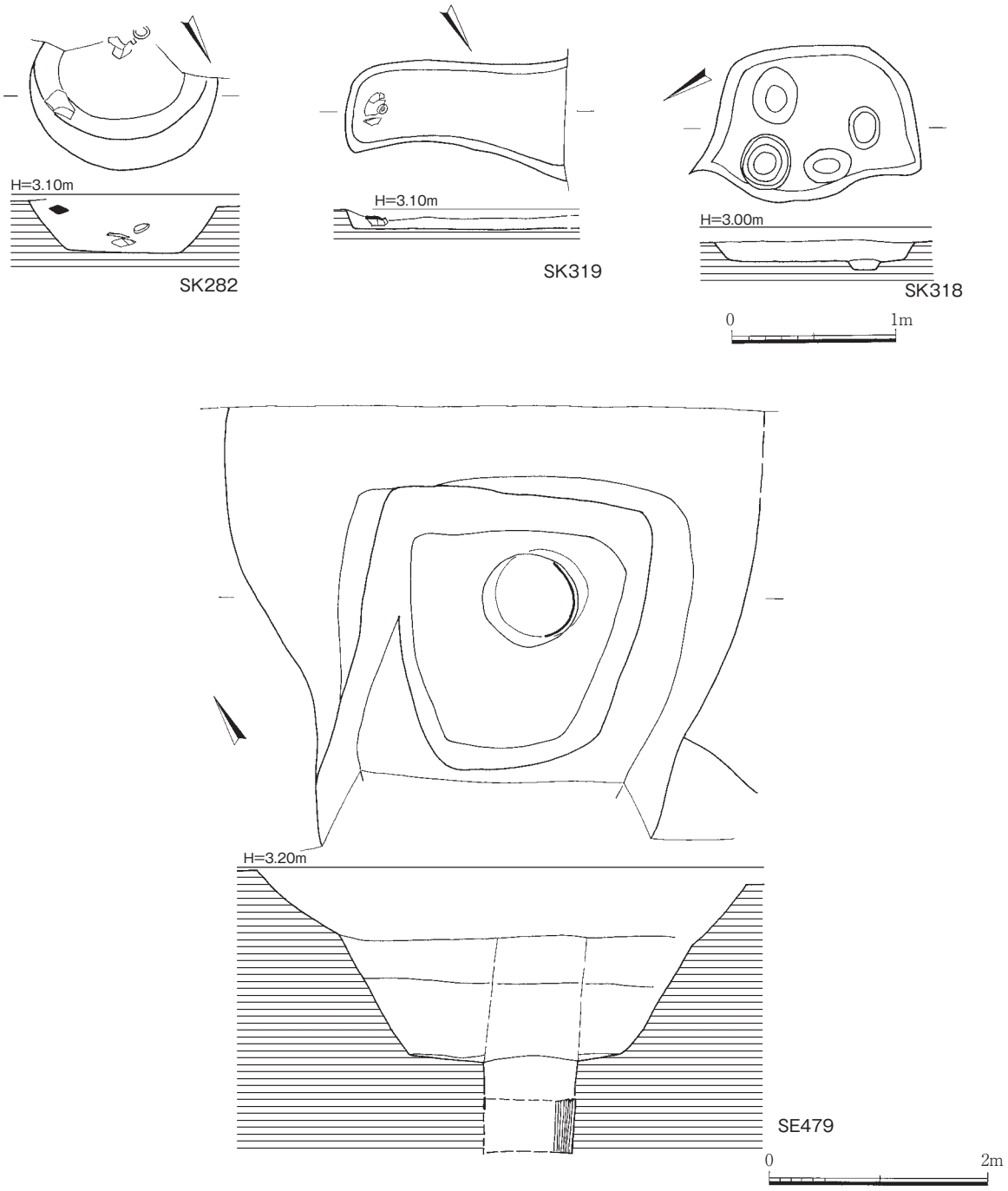
SK318（第13図） 調査区南壁際で東寄りに位置する。掘方は明瞭でない。11世紀代か。**出土遺物（第14図16・17）** 16は土師器埦。復元口径15.6cm，器高5.7cm，底径6.5cm。内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施される。17は黒色土器。内外面ともに黒色を呈する。復元口径9.8cm，器高3.7cm，底径



第11図　SK110遺構・出土遺物実測図（1/20・1/3）



第12図　SK110出土円筒形青銅製品実測図（1/6）

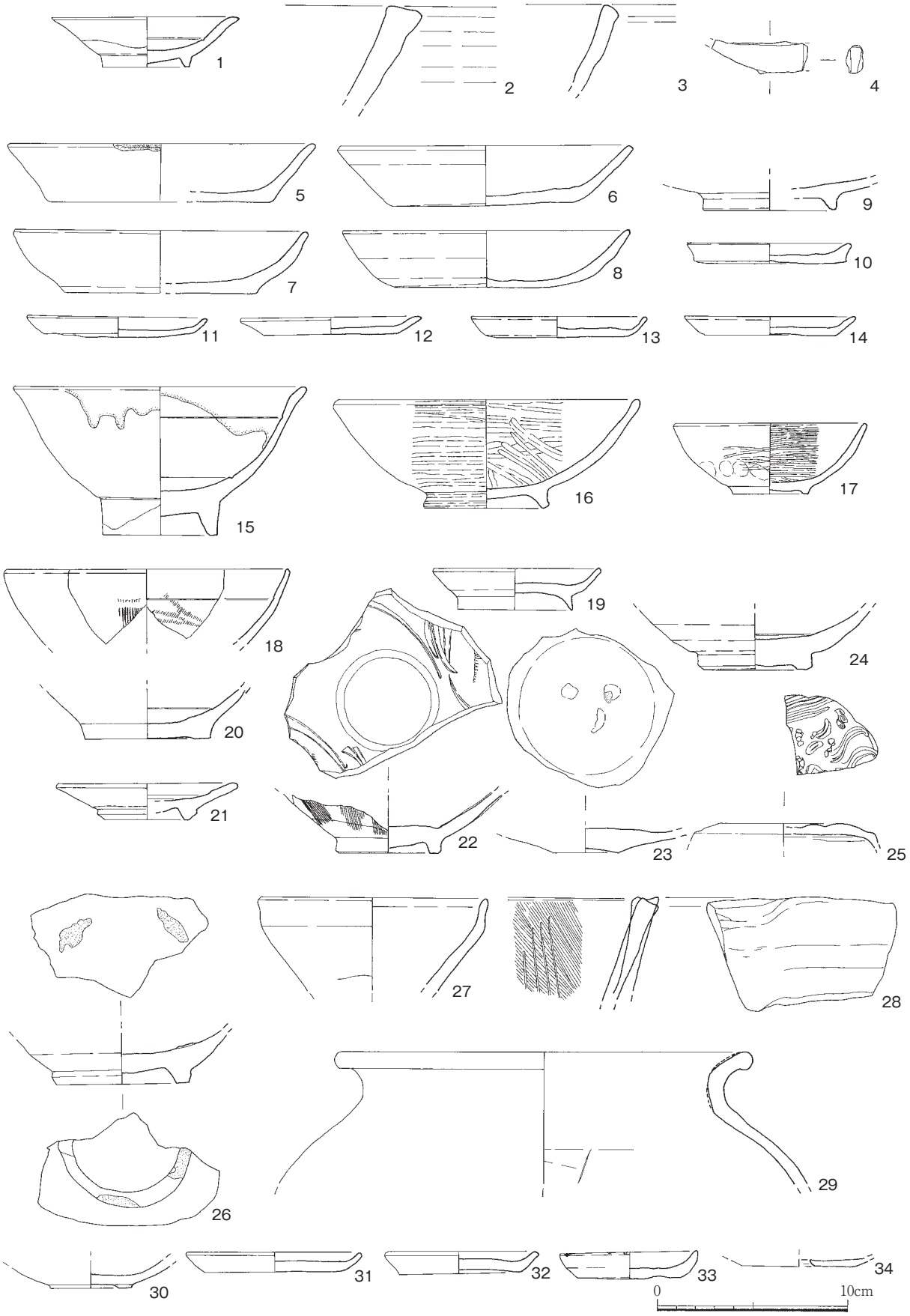


第13図　土坑・井戸実測図（1/40・1/60）

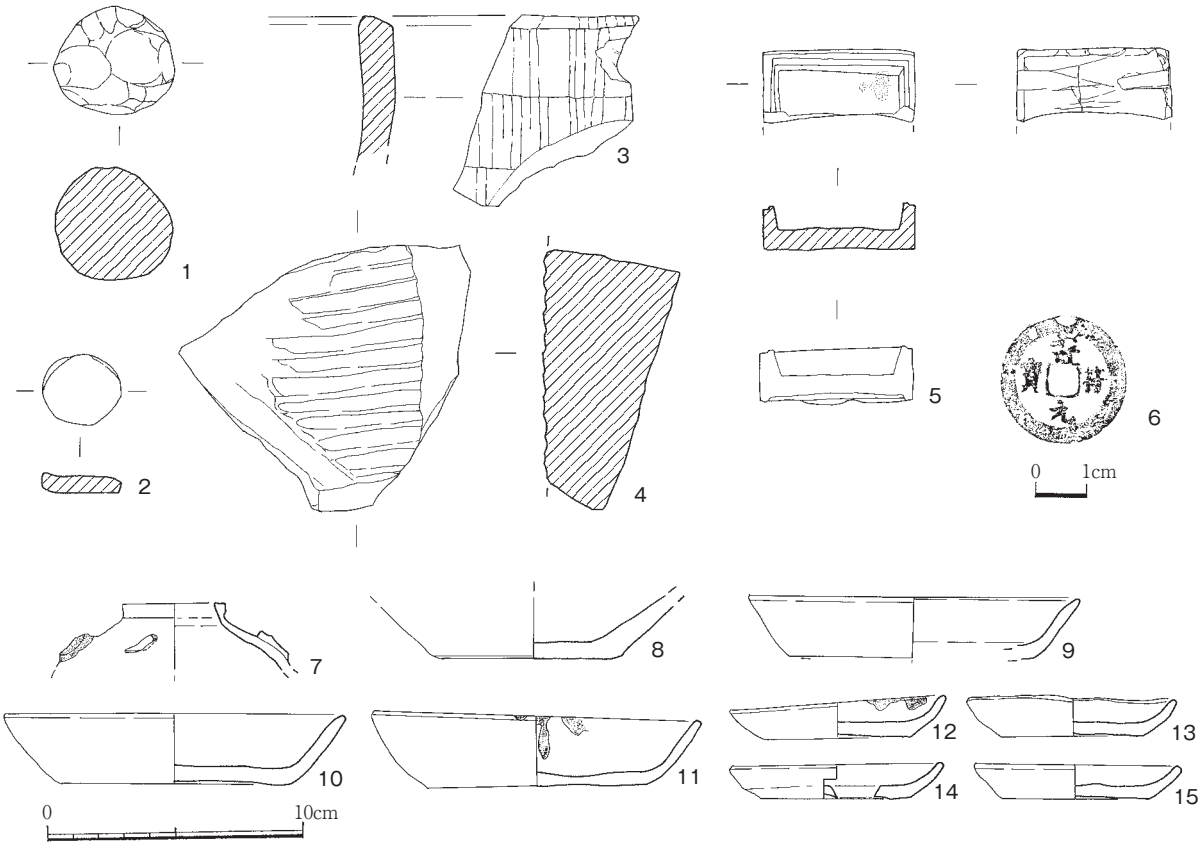
4.0cm。

（3）井戸

SE479（第13図・図版２－５，６）　調査区南壁際西寄りに位置する。南側は壁に切られる。遺構検出時は，掘方は平面円形を呈していたが，掘方を一段下げた段階で方形の掘方のラインが確認された。井筒は結桶で底部付近に投げ込まれた石が確認されたが，湧水が激しく崩壊したため取り上げられなかった。遺物の時期は12～16世紀と広い。井戸の廃絶時期は16世紀頃になる。**出土遺物（第14図**



第14図　土坑・井戸出土遺物実測図（1/3）



第15図　井戸出土遺物実測図（2/3・1/3）

18～34，第15図）　第14図18，19は掘方上層出土。18は青磁碗。櫛描文が施される。19は高台付きの土師器皿。口径8.6cm，器高2.2cm，底径6.0cm。20～34，第15図１～６は掘方中層～下層出土。20は白磁碗。21は白磁皿。見込みは釉を輪状にかきとる。22は青磁碗。外面には櫛描文，内面には刻花文と櫛刺突雷光文が施される。23は青磁皿。24は青磁碗。25は青白磁の合子蓋。外面には印花文が浮彫で施される。口縁部内側端部は露胎となる。26は朝鮮灰青陶器埦。27は天目碗。28は土師質の片口鉢。29は土師質の壷。30は高台付き土師器坏。復元底径4.3cm。31～34は土師器皿。口径7.1～9.0cm。器高1.1～1.4cm，底径5.4～7.3cm。すべて糸切底で，32は板圧痕が残る。34は底部に穿孔が見られる。第15図１は土製の球。２は土製円盤。３は滑石製石鍋の転用品の石錘。４は砂岩製の石臼片。摺目が残る。５は赤間石製の硯。全体に丁寧に削り出しで成形する。６は「祥符元寶」の銅銭。７～15は井筒出土遺物。７は褐釉陶器の四耳壷。８は須恵質の埦。内面に煤の付着が見られる。９は口ハゲの白磁皿。10，11は土師器坏。口径は13.3cm，12.6cm，器高いずれも2.8cm，底径9.0cm，8.7cm。底部は糸切底。12～15は土師器皿。口径8.0～8.4cm，器高1.4cm，底径5.6～6.0cm。底部はいずれも糸切りで，14は穿孔が見られる。

５．第３面の遺構と遺物

（１）土坑

SK161（第16図・図版４－４）　調査区東壁際中央付近に位置する。おそらくは平面円形を呈する土坑であろうが，壁に切られて全体像は不明である。陶器，青磁，土師器，瓦が投棄されている。12

世紀後半頃か。**出土遺物（第17図１～10・図版７）** １は同安窯系の青磁碗。内面に片彫りで曲線，櫛描文，外面には放射状に平行線を描く。２は陶器の壷底部。３～７は土師器坏。口径14.8～15.1cm，器高2.5～3.3cm，底径10.0～10.7cm。いずれも底部は糸切りで，３～５は板圧痕が残る。７は底部に穿孔が見られる。８，９は土師器皿。口径9.2cm，器高1.1，1.0cm，底径7.6，6.4cm。底部は糸切りで板圧痕が残る。10は平瓦。

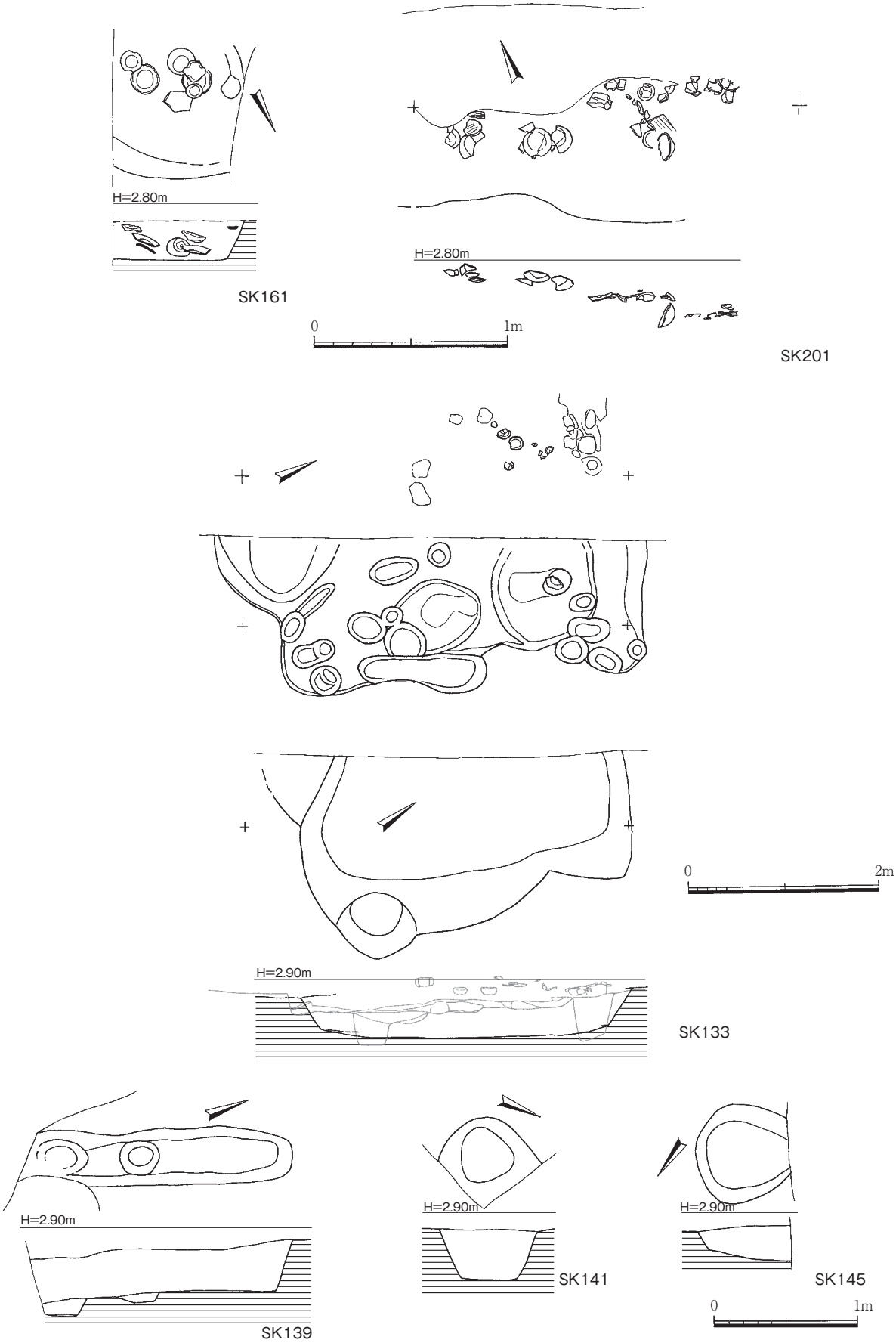
SK201（第16図・図版４－５） 調査区北壁際の中央付近に位置する。掘方は明瞭でなく，土師器が集積した状態で検出された。白磁，青磁，陶器，瓦質土器，土師器，鉄製品が出土している。土師器の様相から11世紀後半まで遡る可能性がある。**出土遺物（第17図11～37・図版７）** 11～13は白磁碗。13は内面に沈線が，外面には櫛描文が施される。14は白磁蓋。15は白磁の四耳壷。16，17は黒色土器。16は埦で，底部付近には板圧痕が見られる。17は皿。18～20は高台付きの土師器皿。口径9.6～10.4cm，器高2.1～2.8cm，底径6.4cm。底部はヘラ切りで高台を貼り付ける。21～27は土師器坏。口径14.9～16.0cm，器高2.9～3.3cm，底径10.9～12.1cm。24以外は底部はヘラ切り，板圧痕が残る。28～35は土師器皿。口径9.0～10.0cm，器高1.0～1.4cm，底径6.9～7.5cm。28，29は底部はヘラ切り，他は糸切り，29以外は板圧痕が残る。36は瓦質土器の皿。底部に穿孔がある。外面には板圧痕が残る。37は鉄製釘。

SK133（第16図・図版４－６，７） 調査区西壁際北寄りに位置する。焼土，粘土塊とともに土師器坏が集積した状態で検出された。これらを除去するとさらに下層にも粘土塊，土師器坏が検出され，土坑状の落ち込みとなった。出土遺物から12世紀前半頃と考える。**出土遺物（第18図１～30・図版７）** １～23は上層の焼土から出土した遺物である。１，２は白磁碗。３は陶器。４は黒色土器の埦。畳付は刻み目が施される。５～８は土師器。５は皿で，復元口径9.7cm，器高2.2cm，底径5.7cm。底部は糸切りで板圧痕が残る。６は坏か。底径7.0cm。底部は糸切り。７，８は埦。７は糸切底に板圧痕が残る。９は高坏の脚部。10～13は土師器坏。口径13.5～17.0cm，器高2.3～3.2cm，底径5.5～12.0cm。10は糸切底，11～13はヘラ切り底。10，12，13に板圧痕が残る。14～21は土師器皿。口径8.0～9.9cm，器高1.0～1.7cm，底径6.7～8.8cm。14，15，19，21は糸切底，16～18はヘラ切り底，14，15，17，21に板圧痕が残る。22は土製の錘。23は土製円盤。24～30は下層から出土した遺物。24は白磁碗。25は土師器坏。口径14.3cm，器高3.0cm，底径5.0cm。ヘラ切り底で板圧痕が残る。26は黒色土器の埦。27は白磁碗。口縁部は輪花をなす。28，29は土師器坏。口径15.0，12.9cm，器高3.2，2.4cm，29の底径は9.5cm。28は内面にコテ当て痕が残る。29は糸切底で板圧痕が残る。30は土師器皿。口径8.6cm，器高0.9cm，底径6.5cm。糸切底で板圧痕が残る。

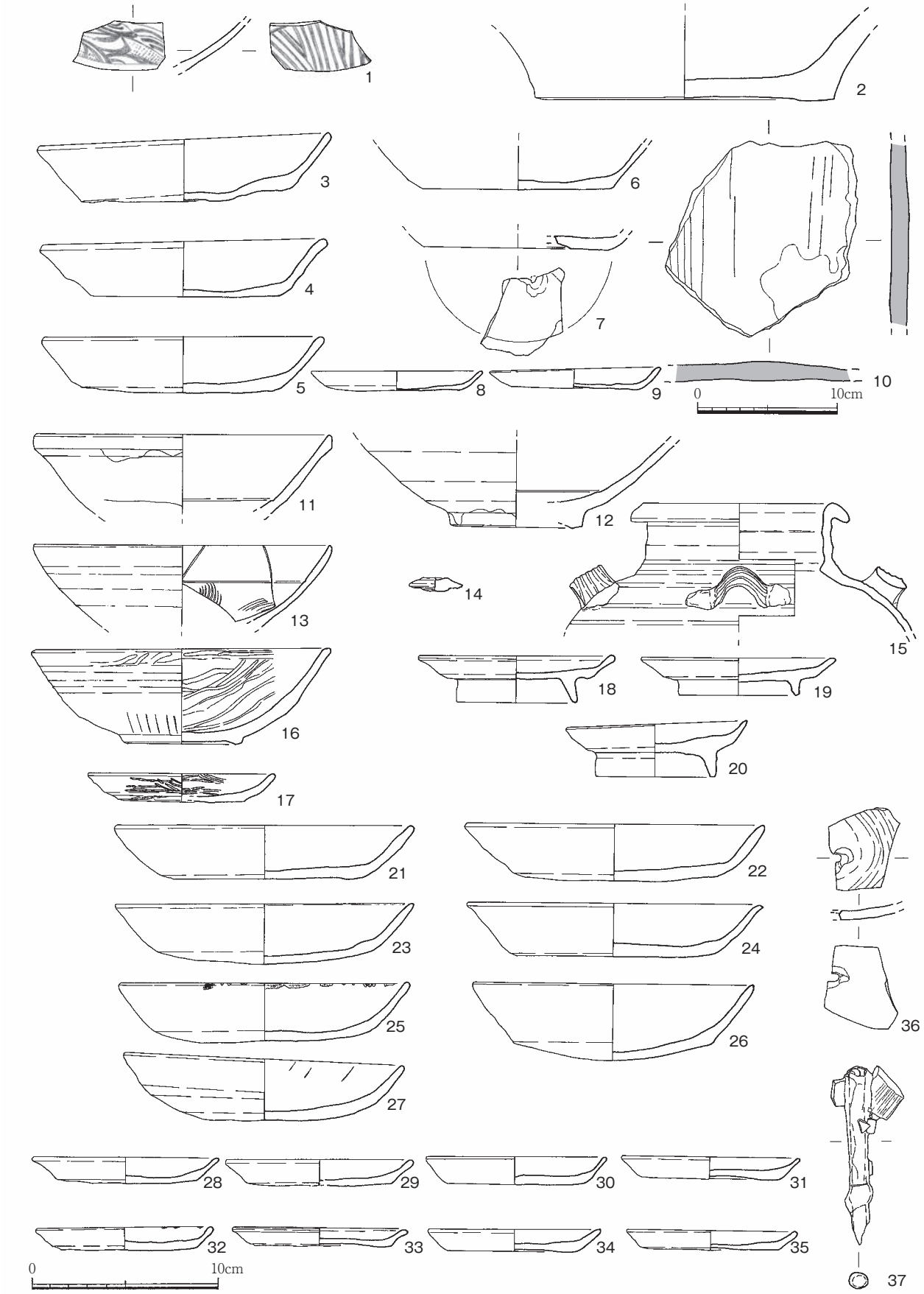
SK139（第16図） 調査区東壁付近に位置する。平面は細長い楕円形を呈し，長軸1.8m，幅0.4m，深さ0.3mである。これは後述する布掘りの柱穴列と一連のものである可能性があるが，検出時に明確な布掘りの痕跡が見い出せず，ここでは土坑として記述する。出土遺物から11世紀後半～12世紀前半頃だろう。**出土遺物（第18図31～34）** 31は土師器坏。口径15.6cm，器高5.3cm，底径4.8cm。内面にはコテ当てによる調整が残る。底部は糸切り。32～34は土師器皿。口縁部がて字状に外反し，底部はヘラ切りで板圧痕が残る。口径9.6～9.8cm，器高1.6～2.1cm。

SK141（第16図） 調査区北東角に位置している。平面円形の土坑。径0.6m，深さ0.3m。12世紀。**出土遺物（第18図35，36）** 35は土師器坏。口径15.0cm，器高3.8cm。内部にコテ当ての調整が残る。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。36は土師器皿。復元口径9.6cm，器高1.9cm。ヘラ切りで板圧痕が残る底部。

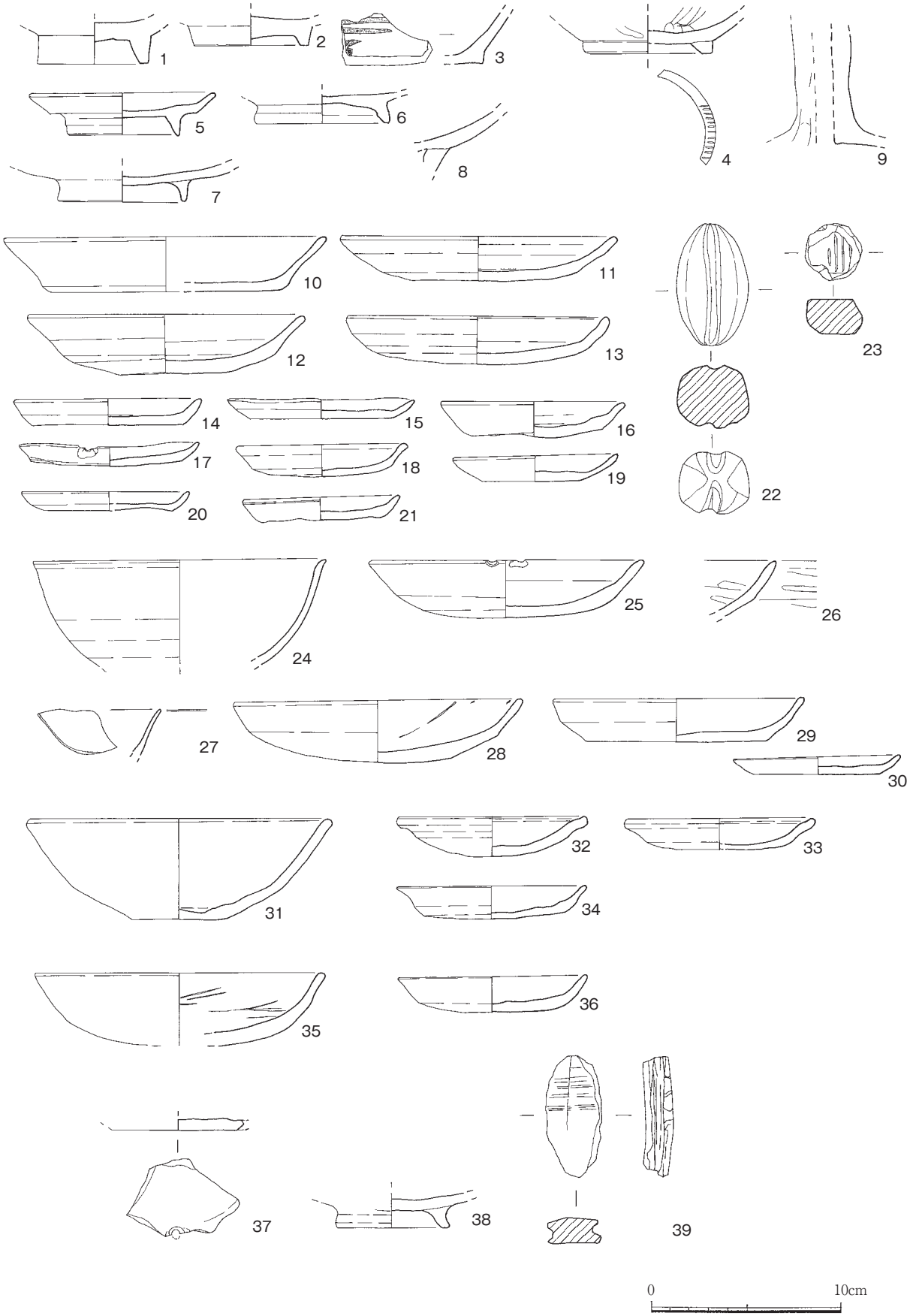
SK145（第16図） SK139の南側に近接する。平面円形を呈する土坑。径0.7m，深さ0.25mを測る。



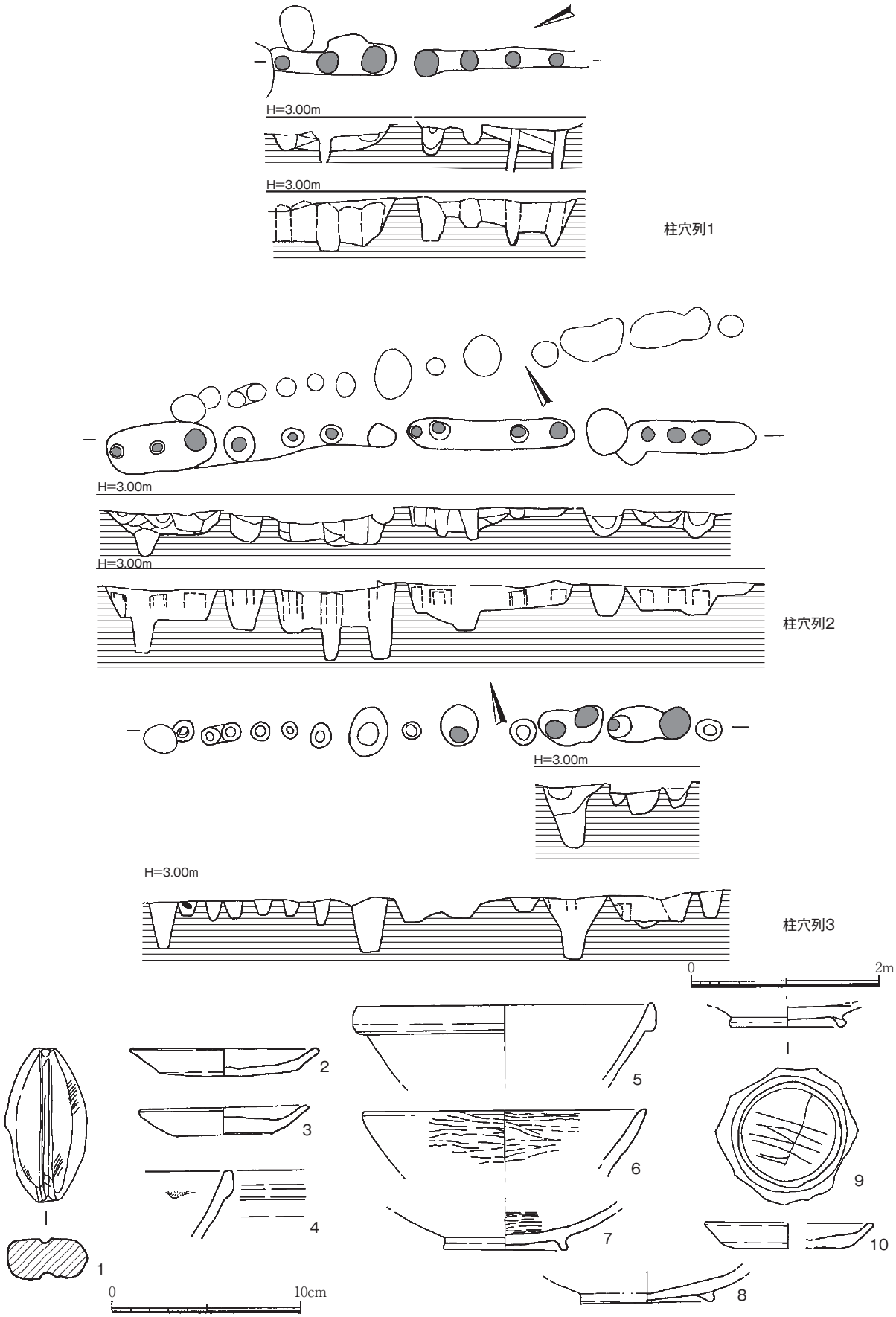
第16図　土坑実測図（1/30・1/40・1/60）



第17図　土坑出土遺物実測図（１）(1/3・1/4)



第18図　土坑出土遺物実測図（２）(1/3)



第19図　柱穴列・出土遺物実測図（1/60・1/3）

出土遺物（第18図37～39） 37は土師器の皿底部。ヘラ切りで板圧痕が残る。穿孔がある。復元底径7.0cm。38は高台付きの土師器埦。底部径5.8cm。39は滑石製石錘。石鍋の転用品。

（２）柱穴列

調査区南側半分のⅡ区第２面で検出した。布掘り状の柱穴列である。明確に検出できたのは，柱穴列１，２，３の三条であるが，他にも上記で記述したSK139のように柱穴列として対応する遺構が存在する可能性はある。

柱穴列１（第19図・図版５－１，２） 調査区の南西側に位置する。方位はN－24°－Eにとる。布掘りが見られるのは，検出範囲においては，４個と３個の柱穴の単位である。**出土遺物（第19図１）** １は滑石製の石錘。

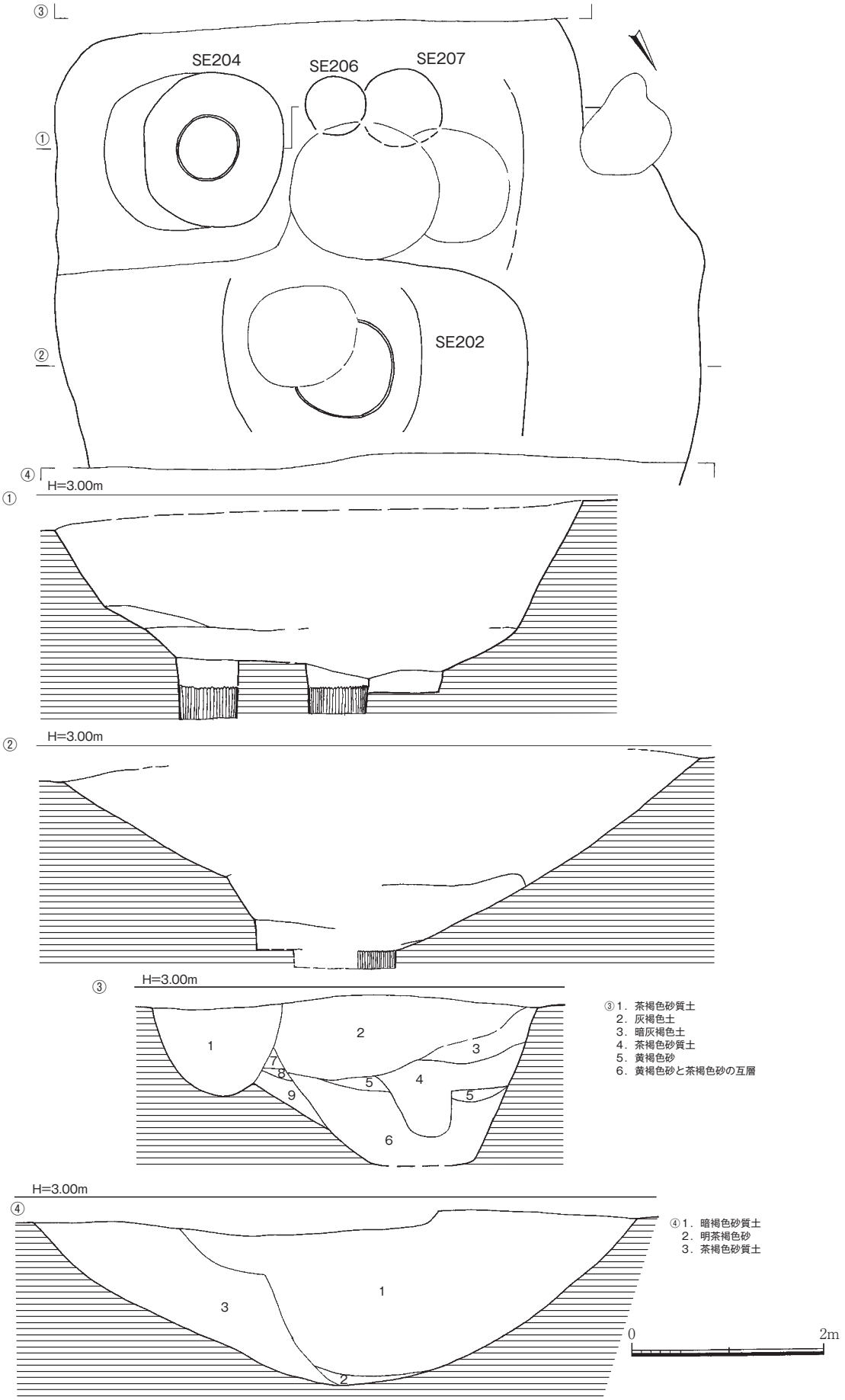
柱穴列２（第19図・図版５－３，４） 調査区の南側に位置し，軸の方位をN－64.5°－Wにとる。布掘りの単位は，柱穴列１と同様，２～４個の柱穴となる。布掘りと布掘りの間に単独でやや大きめの柱穴が２個確認される。**出土遺物（第19図２～４）** ２，３は土師器皿。口径9.5，8.6cm，器高1.5cm，底径7.3，5.0cm。２はヘラ切りで板圧痕の底部，３は糸切底。４は白磁碗の口縁部。

柱穴列３（第19図・図版５－３，４） 柱穴列２と一部重なる。軸の方位はややずれ，N－72.5°－Eとなる。柱穴列２の建て直しとも考えられる。柱穴列２と異なり，布掘りは一部にしか見られない。また，柱穴列２の大きめの柱穴と近接した位置に深い柱穴があり，2.1m西側に離れた位置に同程度に深い柱穴が確認される。**出土遺物（第19図５～10）** ５は白磁碗。６は瓦器埦。内外面ともヘラミガキがなされる。７は黒色土器。８，９は瓦器埦。内面はヘラミガキで，高台が付く。９は高台内部に線刻が見られる。10は土師器皿。復元口径8.6cm，器高1.4cm，底径7.2cm。糸切底で板圧痕が残る。

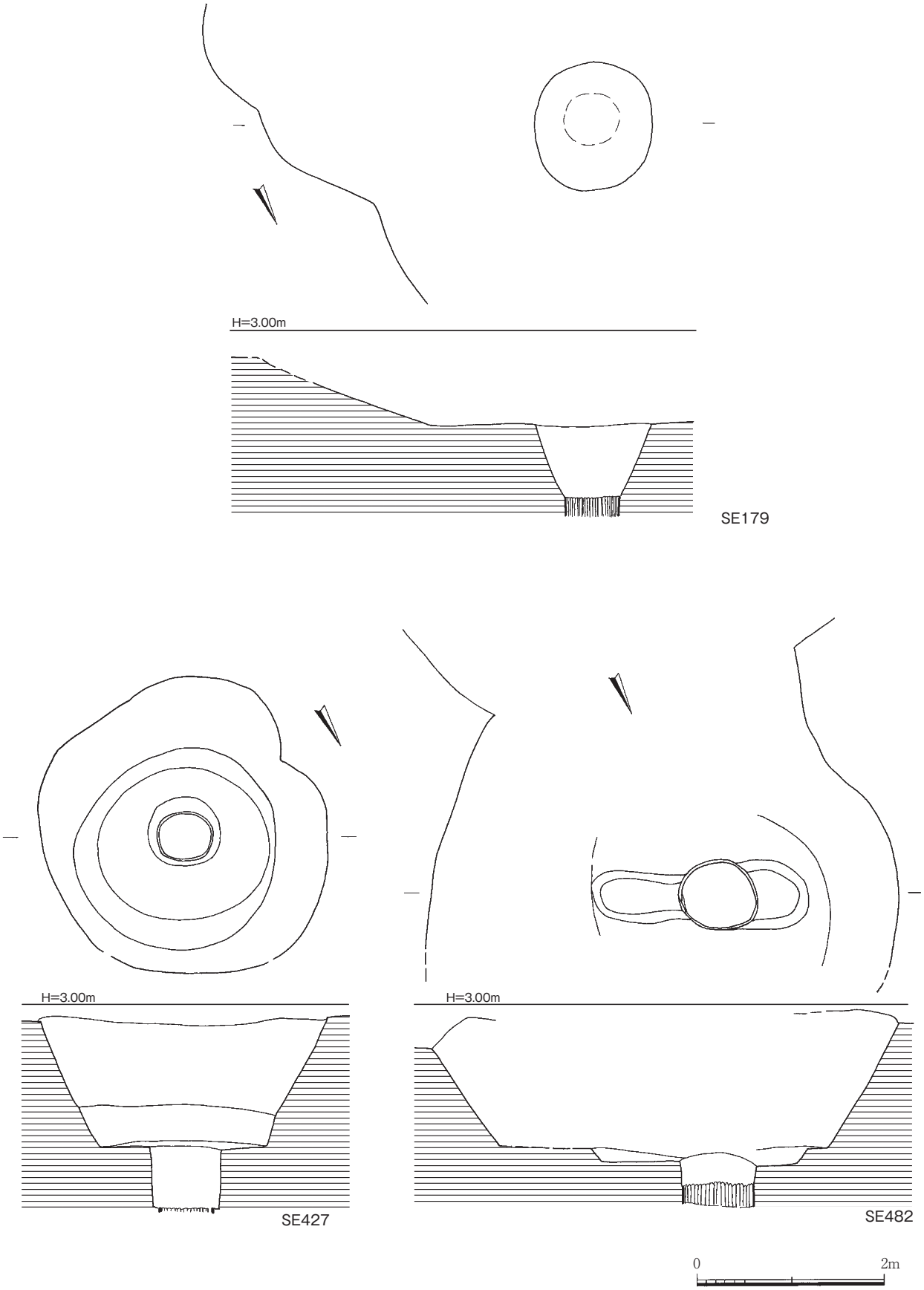
柱穴列２，３の出土遺物は少量であるものの，組成から考えると12世紀代と推定される。柱穴列の性格であるが，調査区の大部分が井戸の掘方で占められ，柱穴列１と柱穴列２，３の関係性が判然とはしない。しかし，その軸の方位や形状，規模から両者の関連は窺える。内部の建物は確認できないが，塀ないし柵であろう。

（３）井戸

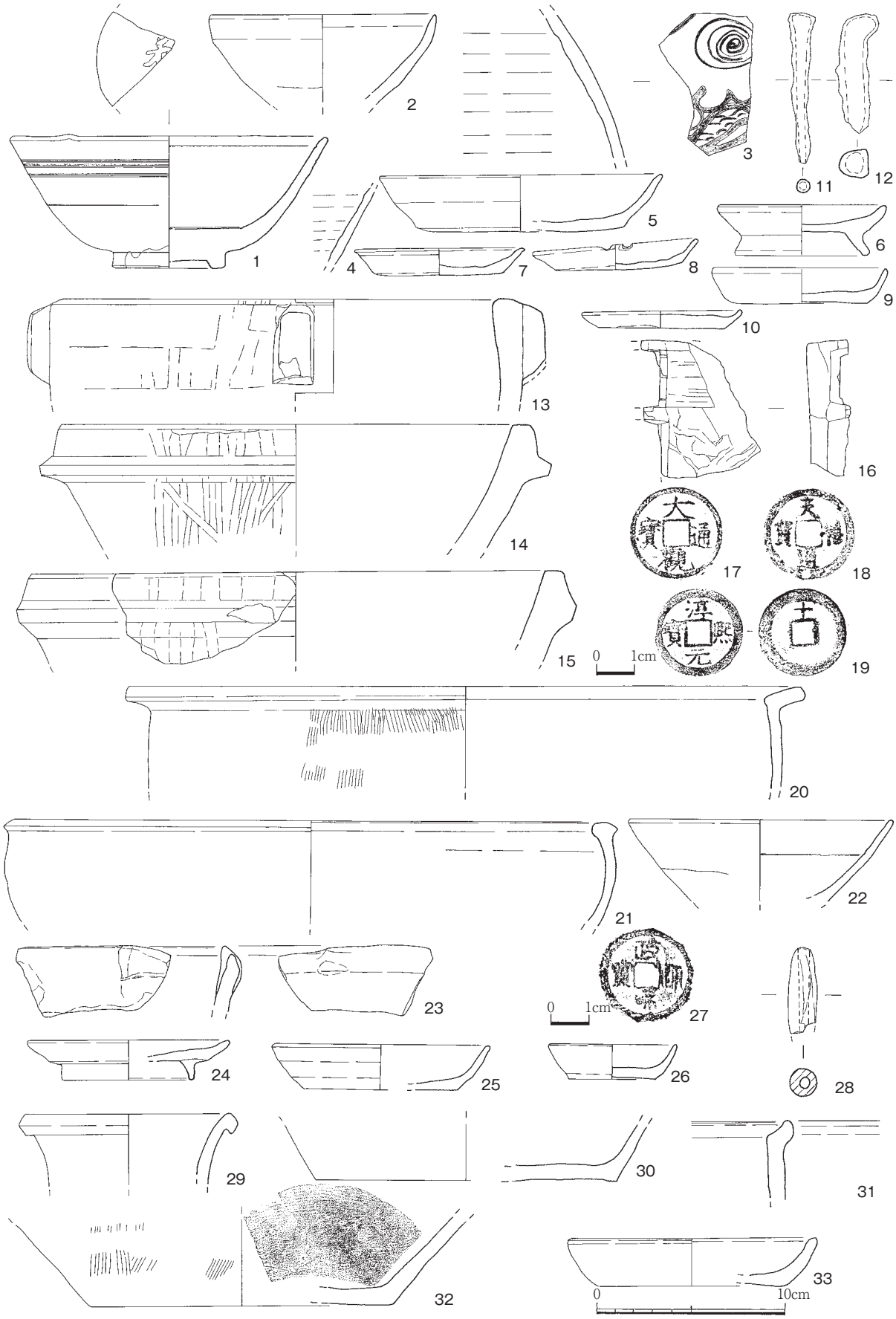
SE202・204・206・207（第20図・図版６－１～６） 調査区北西四半分の大半を占める。Ⅰ区の西側に位置するが，第１面検出当初から遺構面が不明瞭であり，第３面まで掘り下げた結果，井戸の掘方と判明した。この掘方を掘り下げると，現代の井戸に切られ，中世の井筒が点在していた。井筒，掘方出土の遺物は11～16世紀までと幅広いが，SE202，204，206の井筒出土の遺物から見て，いずれも13世紀代であり，16世紀頃に廃絶したと考えられる。**出土遺物（第22図，第23図１～４）** １～20は井戸掘方からの出土。１は青磁碗。口縁部は輪花をなす。見込みには「禾」の文字が暗文で施される。２は天目碗。３は磁州窯系の壺胴部。外面には渦巻文と動物文を鉄絵で描く。４は朝鮮無釉陶器の壺か甕の胴部。５～10は土師器。５は坏。口径14.8cm，器高3.0cm，底径11.0cm。６は高台付きの皿。復元口径8.8cm，器高2.7cm，底径7.0cm。７～10は皿。口径8.4～9.1cm，器高0.9～1.9cm，底径6.7～7.0cm。８の底部がヘラ切りの他は糸切底で，７～10は板圧痕が残る。11,12は鉄製釘。13～15は滑石製石鍋。13は口縁部に瘤状の突帯がつくもの。14，15は口縁部下に鍔が巡るもの。17～19は銅銭。17は「大観通寶」，18は「天禧？通寶」，19は南宋番銭の「淳熙元寶」で背文字は「十」。20は土鍋。21～28はSE202から出土。21は陶器甕。22は白磁碗。23は須恵質の片口鉢。24～26は土師器。24は高台付きの皿。復元口径10.6cm，器高2.1cm，底径7.0cm。25は坏。復元口径11.4cm，器高2.4cm，復元底径8.0cm。糸切底。26は皿。復元口径6.6cm，器高1.9cm，底径4.6cm。糸切底。27は銅銭。篆書体による「政和通寶」。28は土錘。29～33はSE204出土。29は白磁の水注か四耳壺。30は陶器の鉢か盤



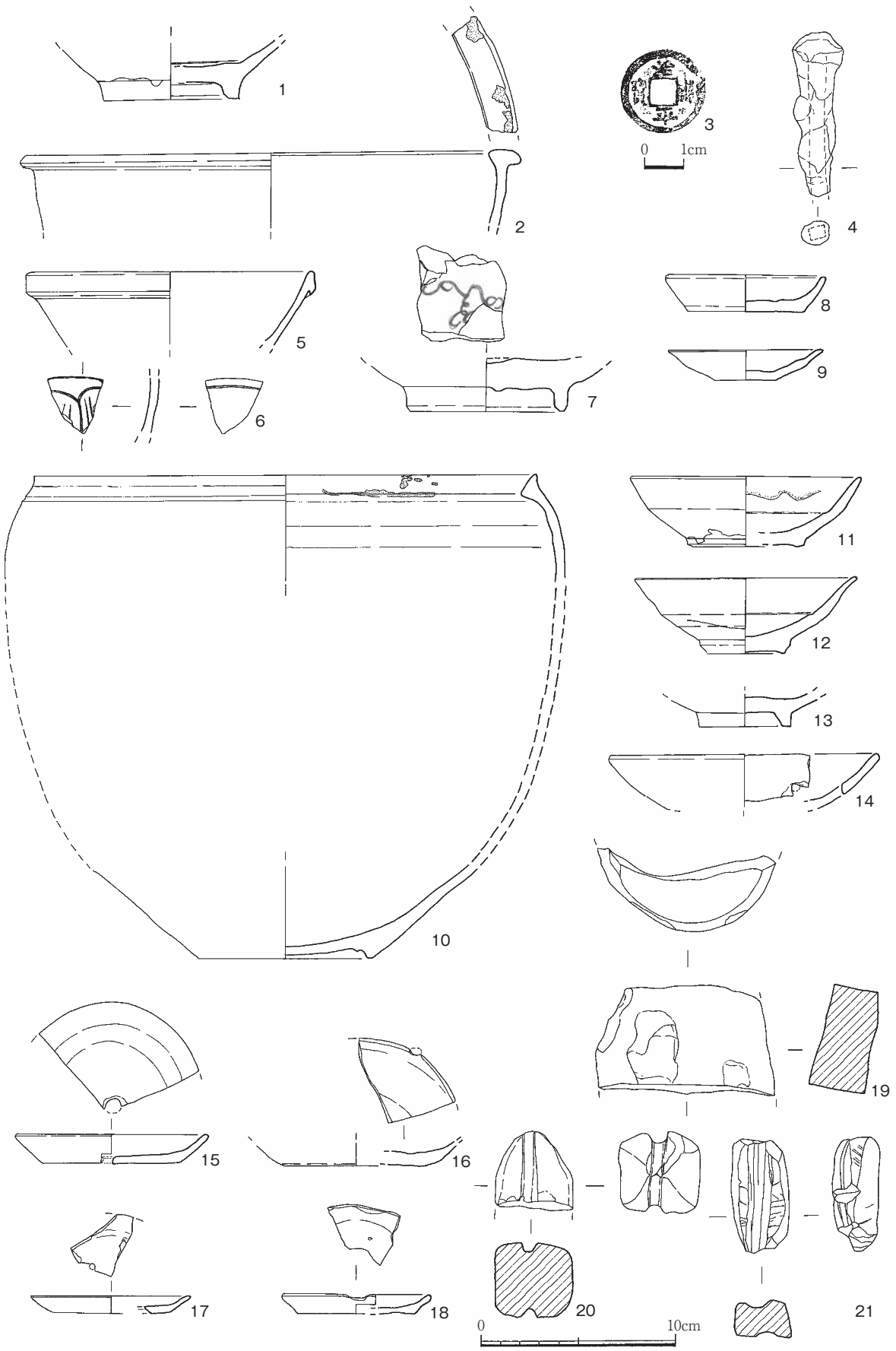
第20図　井戸実測図（１）(1/60)



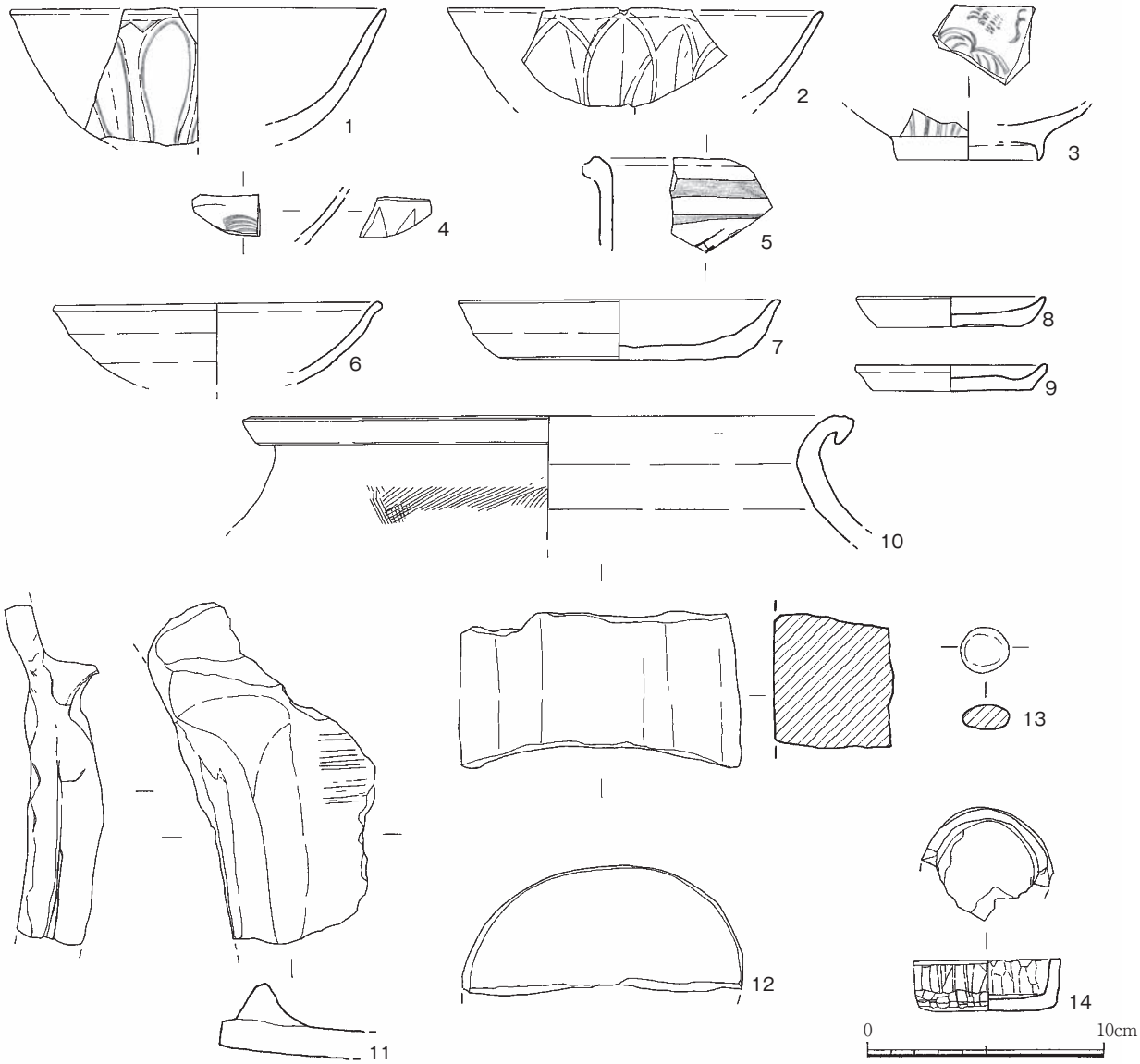
第21図　井戸実測図（２）（1/60）



第22図　井戸出土遺物実測図（１）(2/3・1/3)



第23図　井戸出土遺物実測図（２）(2/3・1/3)



第24図　井戸出土遺物実測図（３）(1/3)

の底部。31は土鍋。32，33は井筒内出土。32は須恵質の擂鉢。33は土師器坏。復元口径12.8cm，器高2.6cm，復元底径9.9cm。糸切りの底部。第23図１～４はSE206出土の遺物。いずれも井筒出土。１は白磁碗。見込みは釉を輪状に掻き取る。２は陶器の盤。３は「治平通寶」の銅銭。４は鉄釘。

SE179（第21図・図版５－５，６）　調査区東寄りに位置する。SE044の石組井側を検出している段階で確認された。結桶の井筒を底部に据える。14世紀代か。**出土遺物（第23図５～９）**　５は白磁碗。６は高麗青磁の碗。内外面ともに白土と黒土による象嵌がなされる。７は青磁碗。見込みに唐草文のヘラ彫りがなされる。８，９は土師器皿。口径8.2，8.0cm，器高1.9，1.6cm，底径6.0，3.1cm。８は糸切底，９はヘラ切りの底部。

SE427（第21図・図版６－７，８）　調査区南東角付近に位置する。掘方は平面円形を呈し，結桶の井筒を底部に据える。本調査地点検出の井戸の中では唯一単独の掘方を持つ。13～14世紀代。**出土遺物（第23図10～21）**　10は陶器の鉢。復元口径26.0cm，復元器高25.0cm，底径9.0cm。淡茶褐色胎土

に緑褐色釉が内外面にかかる。口縁端部に目跡が残る。11～13は白磁。11は碗。12，13は皿。14は土師器坏。復元口径13.7cm。底部付近に穿孔がある。15～18は皿。15は瓦器で，復元口径9.8cm，器高1.5cm，復元底径7.1cm。底部は糸切りで，口縁部に穿孔がある。16～18は土師器。16の復元底径8.0cm。底部は糸切りで穿孔がある。17, 18は復元口径8.2, 7.6cm, 器高0.9, 1.0cm, 復元底径6.0cm。いずれも糸切底で板圧痕が残る。底部に穿孔がある。19は玄武岩製の石臼片。20, 21は滑石製の石錘。

SE482（第21図・図版６－９，10） 調査区北西側，SE479の北側に位置する。SE479に切られているが，掘方底面に結桶の井筒が据えられる。遺物は12～14世紀代まで出ているが，図化していないものの井筒や掘方から土鍋片が出土しており，14世紀代で，16世紀頃の廃絶と思われる。**出土遺物（第24図）** １～９は掘方出土。１，２は龍泉窯系の青磁碗。片切彫りの連弁文が施される。３，４は青白磁碗。３は内外面に片切彫りの文様，４は外面に剣菱文様，内面に櫛描文が施される。５は緑釉陶器。器形は不明。磁州窯か。６，７は土師器坏。６は復元口径13.7cm，７は復元口径13.6cm，器高2.5cm，復元底径10.3cm。８，９は土師器皿。復元口径7.8，8.2cm，器高1.3，1.1cm，底径6.1，6.8cm。いずれも糸切底で板圧痕が残る。10は井筒出土。瓦質土器の壷。11～14は土製品及び石製品。11は土師質の竈。焚口部が残る。12は玄武岩製の石臼片か。13は石製の石玉。14は滑石製の容器。

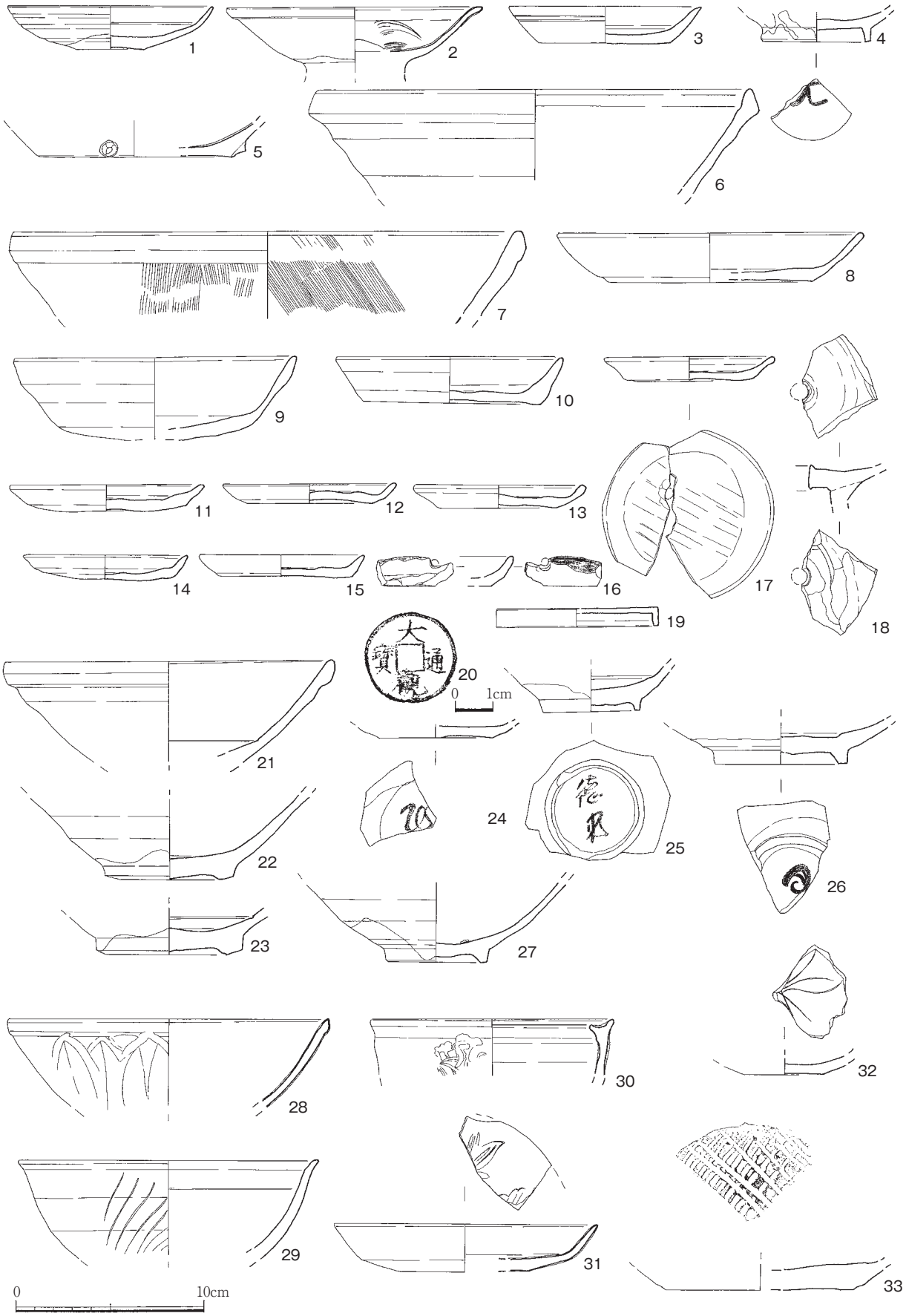
６．その他の出土遺物

（１）包含層出土の遺物（第25図，第26図）

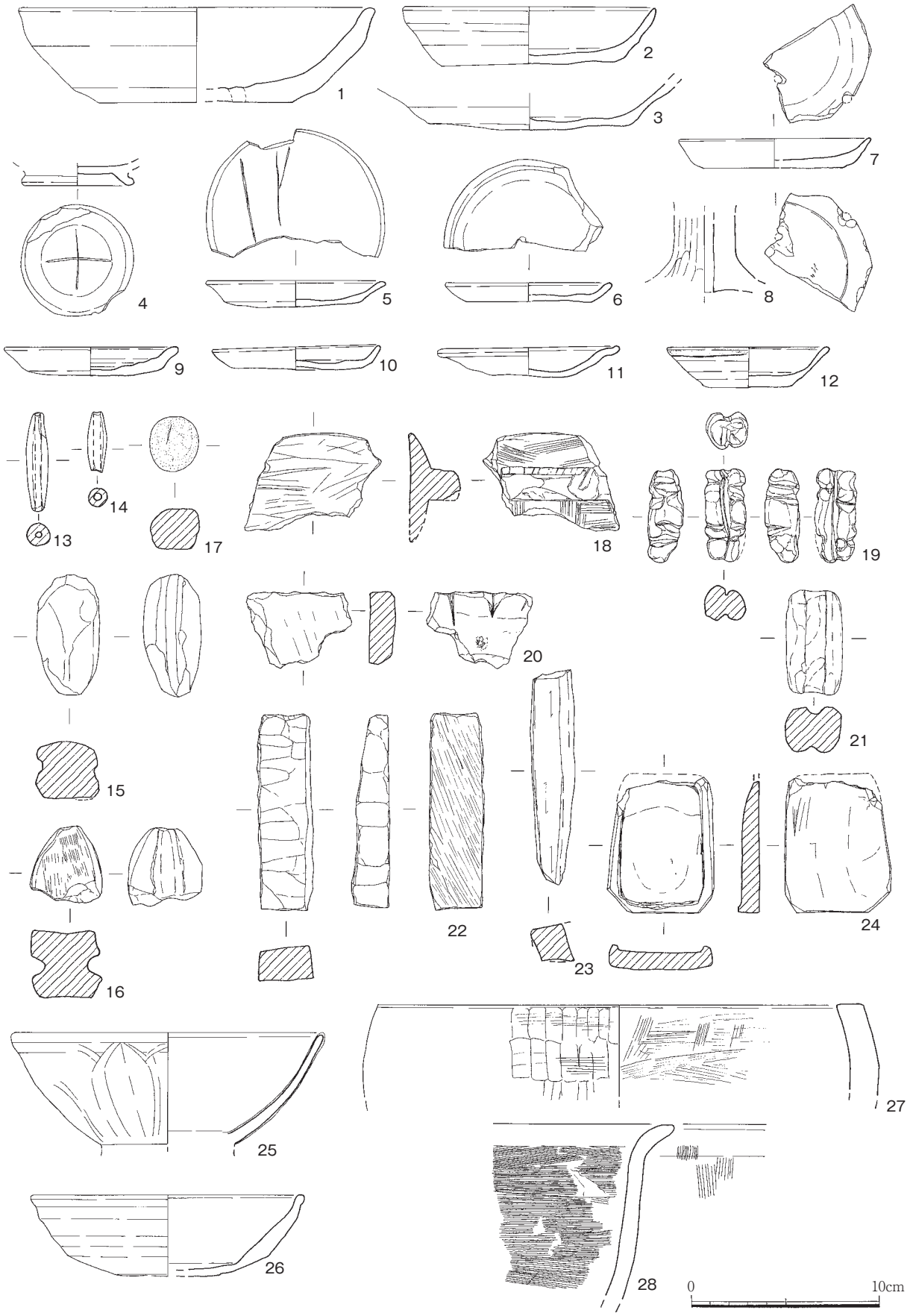
第25図１～20は１層出土の遺物。１は青磁皿。２は青磁碗。３は白磁皿。口ハゲの口縁部。４は墨書陶器。高台内部に墨書が施される。５は青磁の鉢。円形の粘土粒が貼り付けられている。６は須恵質のこね鉢。７は土師質のこね鉢。８～10は土師器坏。復元口径16.4，15.0，12.0cm，器高2.6，4.4，2.5cm，底径5.6，10.2，9.4cm。いずれも底部は糸切りで８，10は板圧痕が残る。11～17は土師器皿。底部は11，17はヘラ切り，その他は糸切り，14，17は板圧痕が残る。16は口縁部に煤が付着し，穿孔が見られる。17は底部に穿孔の痕跡が残る。18は底部に焼成前穿孔が残る土師質の高台付き坏。19は滑石製の蓋か。20は銅銭。「大観通寶」。

第25図21～33，第26図１～24は２層出土の遺物。第25図21～23，27は白磁碗。24～26は墨書土器。24，25は白磁皿。24の底部に墨書が見られる。25は「徳安」とみられる墨書が高台内部に残る。26は青磁碗。高台内部に墨書が見られる。28，29は青磁碗。28は片切彫りの連弁文が施される。29は外面に斜めの条線，内面に沈線が巡る。30は蓋付きの青磁鉢か。31，32は皿。31は青白磁。見込みに花文が施される。32は青磁。見込みに線刻で文様が施される。33は瀬戸焼の卸皿。第26図１～12は土師器及び瓦器。１は土師器埦。底部は糸切り。２は土師器坏。糸切底を呈す。３は土師器の埦か。糸切底を呈す。４，５は器壁に線刻が見られる。４は土師質の高台付きの坏。底径6.0cm。高台内部に十文字の線刻が入る。５は土師器皿。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。内面に数条の線刻が見られる。６，７は穿孔がある土師器皿。６の底部は糸切りで板圧痕が残る。底部中央付近に穿孔がある。７は底部と口縁部に穿孔が見られる。８は土師質の高坏脚部。９～11は土師器皿。９は底部はヘラ切り，10は糸切りで板圧痕が残る。11はて字状口縁をなす。12は瓦質の埦。口縁部は黒色を呈す。底部は糸切り。13～24は土製品及び石製品。13～16は土錘。13，14は孔が穿たれるもの，15，16は断面が工字状を呈すもの。18～21は滑石製の石錘。すべて石鍋の転用品と思われる。17は石製の投弾か。22は滑石製の加工品だが，用途は不明。23は砥石。玄武岩か。24は須恵質の硯。

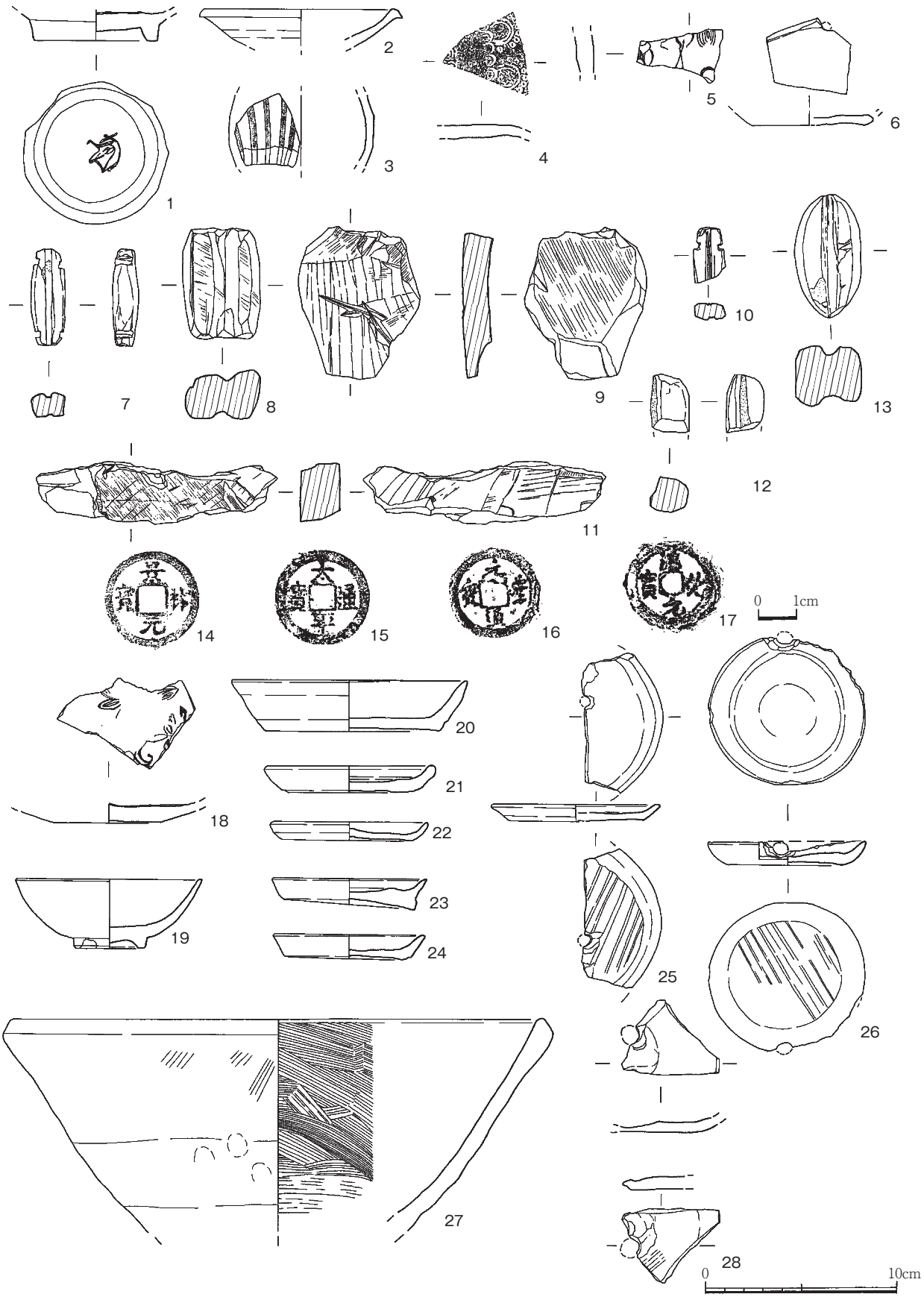
第26図25～28は第３面で検出した遺物。25は青磁碗。外面に鎬連弁文が施される。26は土師器坏。底部はヘラ切り。27は滑石製の石鍋。28は土鍋。



第25図　包含層出土遺物実測図（１）(2/3・1/3)



第26図　包含層出土遺物実測図（２）(1/3)



第27図　その他の出土遺物実測図（2/3・1/3）

（２）遺構その他出土遺物（第27図）

第27図１～17は遺構出土。１はSK118出土。墨書のある白磁碗。高台内部に花押のような墨書が見られる。２はSK188出土。白磁皿。３はSK049出土。中国陶器か。内外面に黒褐色釉がかかる。外面下半は露胎となる。４はSK008出土。新羅陶器の合子蓋か。混入と思われる。５はSK067出土。高麗青磁の瓶。外面に象嵌が施される。６はSK173出土。土師器皿。復元底径6.0cm。底部に穿孔がある。７～12は滑石製石錘。７はSK238，８はSK372，９はSK083，10はSK428，11はSK213，12はSK142出土。13は土錘。SK472出土。14～17は銅銭。14は「景祐元寶」，15は「太平通寶」，16は「元豊通寶」，17は「淳化元寶」。14，15はSK092出土，16，17はSK213出土。

18～28は調査区壁，廃土等から出土した。18は白磁皿。見込みに草花文が施される。19は青磁小碗。20～26，28は土師器。20は坏。底部は糸切り。21～26，28は土師器皿。すべて糸切底で，21，22，25，26に板圧痕が残る。25，26，28は穿孔がある。27は瓦質のこね鉢。

７．まとめ

以上の所見から考えられることを以下に述べてまとめとしたい。

①11世紀後半頃が遺構の初現時期となり，12世紀代に入って遺構が展開していく。土師器の集積遺構や柵列など一般集落とは少し異なる様相が見られる。

②13～14世紀になり，井戸群が形成される。その廃絶は16世紀まで下るものも見られる。17世紀にも井戸が掘られる。

③14世紀前後には井戸の他に土師器の集積遺構，青銅製品埋納遺構が見られる。特に青銅製品埋納遺構は調査区北端に単独で位置しており，その展開は調査区外に伸びていくと思われるが，北側の第７次調査地点では残念ながら確認されていない。

④遺物において，本調査で最も出土量が多かったのは土師器であり，坏や皿に穿孔が施されるものが散見された。陶磁器では，白磁，青磁の他，高麗青磁，天目埦，墨書土器，新羅陶器が出土している。その他，石製，須恵質の硯が見られた。最も多い石製品は滑石製の石鍋を転用した石錘である。

以上から，11世紀後半頃から12世紀代，筥崎宮が建立され門前町が展開していった時期に当該地域でも集落が形成されはじめたことが窺える。柵列遺構や穿孔された土師器，墨書土器，硯などの出土遺物から，それは筥崎宮に関連した公的施設であった可能性が高い。13世紀代に入ると状況が変わり，井戸が形成される。しかし，14世紀以降は柱に根巻を施すような建築物が築造された後廃棄されていた特殊な様相が再び見られる。これは調査区西側の第51次調査地点で検出された基壇を伴う建物群と関連する可能性もあるが，間をつなぐ遺構が現時点では確認されず，今後の周囲の調査での再検討を要する。

このように，当該地域では筥崎宮の動向と連動して集落が展開していたことが窺える。

１　Ⅰ区第１面全景（南東から）

２　Ⅰ区第１面北西側（北西から）

３ SK001（東から）

４ SK060（北西から）

５ SK066（南東から）

６ SE044（北から）

７ SE044井側内（東から）

図版２

１　Ⅰ区第２面全景（北西から）

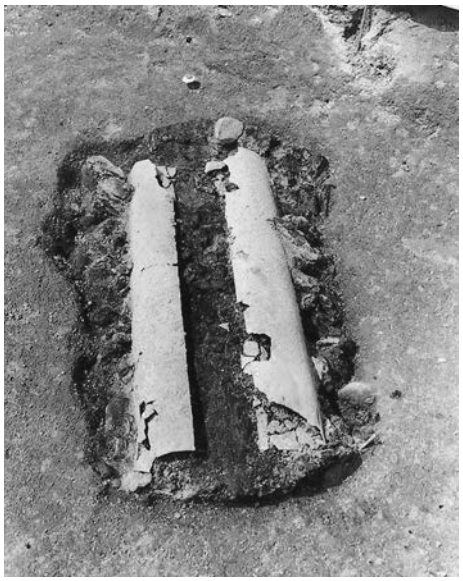
２　Ⅱ区第２面全景（北西から）

３　SK282（東から）

４　SK319（北から）

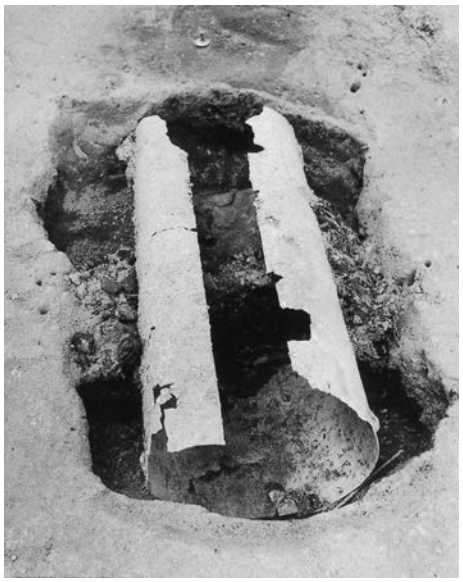
５　SE479（北東から）

６　SE479井筒（北西から）



１ SK110検出状況（南から）

２ SK110内部四分割（南東から）



３ SK110内部半裁状況（南から）

４ SK110青銅製品内部（南西から）

５ SK110取り上げ後（北から）

６ SK110掘方完掘状況（南から）

図版４

１　Ⅱ区第３面全景（北西から）

２　Ⅰ区北西側第３面（南西から）

３　Ⅰ区南東側第３面（北東から）

４　SK161（北東から）

５　SK201（北西から）

６　SK133（南東から）

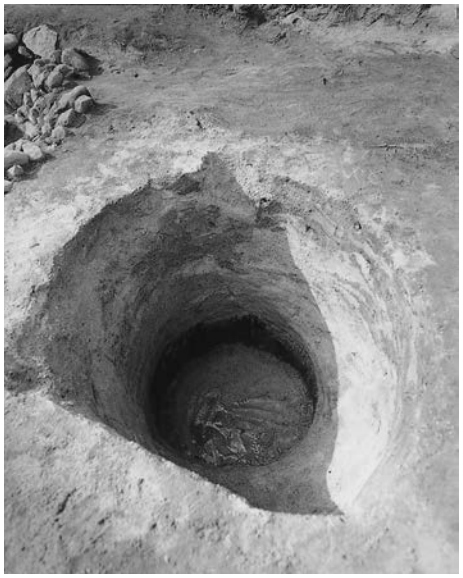
７　SK133完掘（南から）

１ 柱穴列１一段下げ（南西から）

２ 柱穴列１完掘（南西から）

３ 柱穴列２，３一段下げ（北西から）

４ 柱穴列２，３完掘（北西から）



５ SE179（南東から）

６ SE179井筒（北西から）

図版６

１ SE204（南東から）

２ SE202（南東から）

３ SE206，207（南東から）

４ SE204井筒（北西から）

５ SE202井筒（南西から）

６ SE206井筒（北東から）

７ SE427（東から）

８ SE427井筒（北から）

９ SE482（西から）

10 SE482井筒（南から）

SK001　出土遺物

SK060　出土遺物

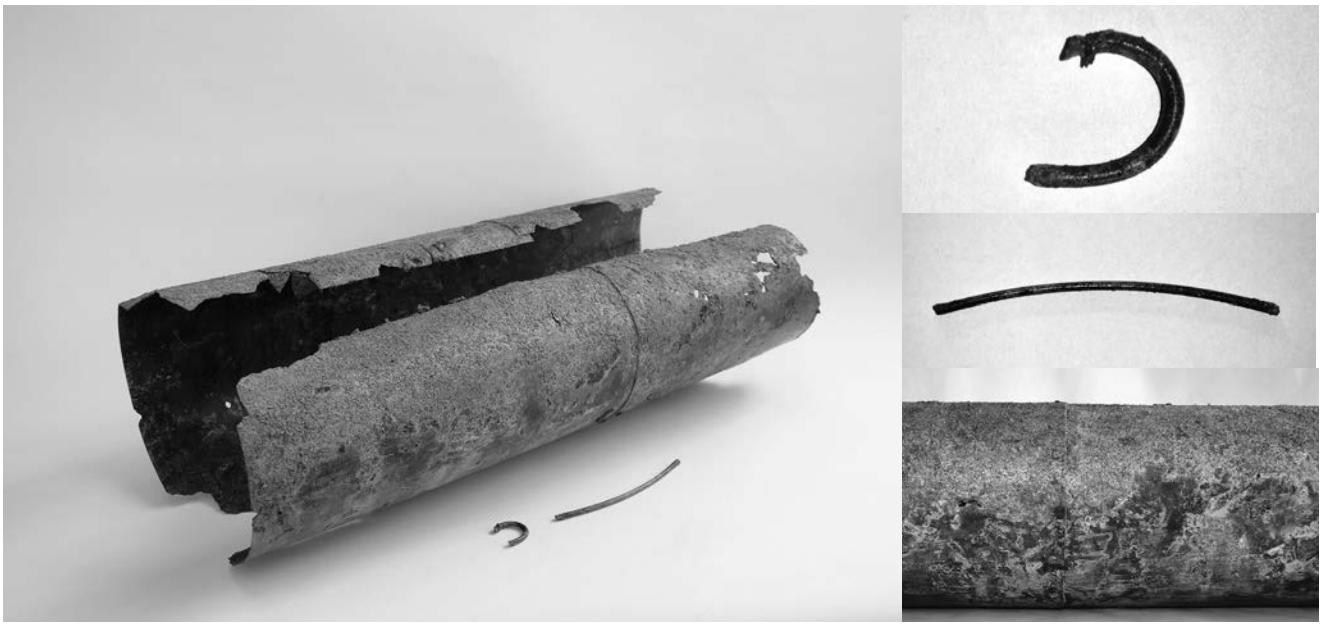
SK066　出土遺物

SK161　出土遺物

SK201　出土遺物

SK133　出土遺物

遺物写真１



SK110　青銅製品

硯

墨書土器

穿孔土器

石錘

土錘

朝鮮系陶磁器

遺物写真２

抄　　録

ふりがな	はこざき49
書　名	箱崎49
副書名	箱崎遺跡第73次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1316集
編著者名	井上繭子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2017年３月27日
所収遺跡名	箱崎遺跡第73次（はこざきいせき）
所在地	福岡市東区箱崎１丁目2709番，2708番２（ふくおかしひがしくはこざき１ちょうめ）
市町村コード	40131
遺跡番号コード	2639
北緯・東経	北緯　130°25′16″・東経33°37′14″
調査期間	20150406～20150810
調査面積	310㎡
調査原因	共同住宅建設
種別	集落
主な時代	中世～近世（11世紀～17世紀）
主な遺構	青銅製品埋納遺構・土師器集積遺構・井戸・布掘りの柱穴列
主な遺物	土師器・輸入陶磁器・石器・瓦・青銅製品
特記事項	筒状に曲げ内外に木炭を詰めた青銅製品埋納遺構が検出された。
要　約	本調査地点は箱崎遺跡のやや北寄り，筥崎宮の北側に位置する。11世紀から17世紀を主体とする遺構や遺物が検出された。青銅製品埋納遺構，土師器の集積遺構，布掘りの柱穴列が検出され，筥崎宮に関連する性格が窺える。また，井戸が多く確認されたことから，生活域として利用されていたことも考えられる。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1316集

箱崎４９

― 箱崎遺跡第73次調査報告 ―

2017年（平成29年）３月27日

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　　刷　魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20